

# 評書

第 34 号  
1974.4



書評編集委員会

## 編集後記

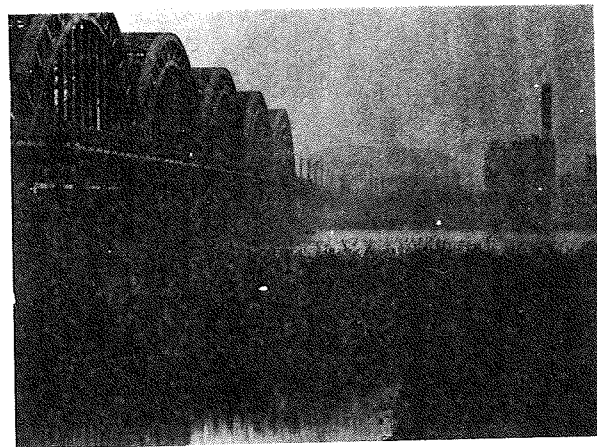
キャンパスに春の日ざしとともに新入生がよまれる季節。

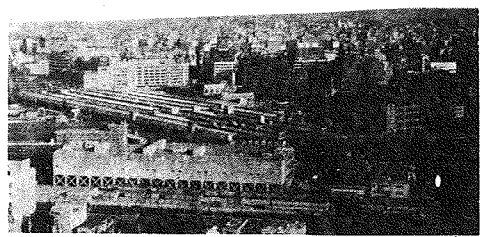
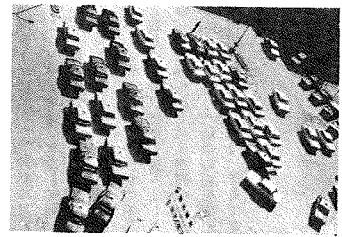
当編集委員会では、昨年度の年間テーマ「人間性の追求」に変えて今年度は「日常生活の再確認」というテーマを設定した。多様で混沌としたかのように見える現在の生活様式や意識になにか画一化されたものを感じるのは、はたしてわれわれだけであろうか。現実の社会的形態をささえている日常生活の意味を批判し検討していきたいと考えている。

また、昨年度の総括(第三号)をふまえた上で内容の充実をはかりたい。本の大きさは第三号以来のA5版で、紙質は昨年末からの紙不足が価格の高騰をもって一段落つたため、第三号以前の紙質にもとず。

紙面は、各号のモチーフを主体とした「書評」や評論研究ノートは従来そのままであるが、内容を豊富にするため投稿を積極的にとりあげていきたい。具体的には六七ページの投稿募集のとおり。読者の参加を呼びかけたい。「書評」誌以外の活動については、講演会や映画会を開催し、モニターの設置や、討論会も考えていきたい。

また、新学期でもあり、編集委員を募集している。募集の要項は六七ページのとおり。特に、新入生諸君の参加を待っている。





■書評

現代史のはざままで……………河本 康夫 6

——『九月のクロニクル』ポール・ニザン 著——

田淵豊吉議会演説集 I……………木坂順一郎 13

——『瑛人政治家の帝国議会での活動』小山仁示 編——

■評論

北村透谷小論……………田中 孝夫 20

私の中の宮澤賢治……………村上 順一 26

■特別寄稿

ビートルズと対抗文化……………中農 晶三 30

——『感覚革命について』——

■私の研究ノートから

日中文化関係史の一面 (XVI)……………増田 涉 38

差別の空間構造 (VIII)……………末吉 栄三 45

戦後日本企業の特許戦略史 (III)……………堀 康三 52

巻頭言……………4  
読者の声……………65  
書物の案内……………66  
告知……………67  
編集後記……………68

題 字・網干善教文学部教授  
表紙デザイン・稲川文代  
カット写真・関西大学写真部



## 巻頭言

# ——日常生活の再確認——

昨年度、三三号でおこなった総括をふまえ、今年度の年間テーマを「日常生活の再確認」とした。

われわれが今年度の「書評」運動のテーマとして掲げた「日常生活の再確認」という目標は、言い換えれば「われわれの日常生活をよく見つけてみよう」ということに他ならない。誤解を招かないために一言付け加えるならば、ここにいう「よく見つけてみよう」という呼びかけの背後には、なんと倫理的な目的意識性は含まれていない。つまり、生活に内在する「悪徳」を追放して「清浄」しようというような宗教的な価値観に裏づけられたものではなく、また体制的「節約」運動に呼応するようのものであってはならないのは当然のことである。「よく見つけてみよう」という課題が真に目標とするところは、われわれの日常生活を

様々な視点から捉え、その人間の現実の内部に今日われわれが置かれている立場の歴史的な本質と、人間として存在することの意味を探ることである。

しかし、今日におけるわれわれの日常生活は高度で抽象的な思維にとつては興味の対象とはなっていない。むしろ入思想<sup>イデオロギア</sup>は、日常的なものから逃避することによって理想的なるものを追求し、日常性をひたすらに否定し、それを否認しつづけることによって「人間的」であらうとする。ここから、われわれの現実の歪曲や一面的把握による主観的理想化の契機も生まれるのである。もちろんこのように、意識が日常生活を正確に理解することができず、そこに何の意味も見い出し得ないままに非日常的なるものを希求することによって充足しようとするこの原因は、現代社会

における日常生活の展開そのものの内部にある。

資本主義の確立とともに、労働は個人にとって人間的実践としての意義を喪失し、また機械化と合理化による分業化の進展は生産を単純作業へと分解させ、それに携わる人間を専門的な技術<sup>テクニク</sup>の、あるいは生産過程の一部門の人格化へと変貌させた。肥大した生産力が市場に送り出す大量の商品は、その販売戦略としての広告とともにわれわれの価値観を徐々に多様化させ、また高度化し全社会をもその掌中に納めるようになった管理機構は、われわれを私的で受動的な個的存在へと分断してしまつた。われわれはまさにルフェュブルの言うように「潜在的な自動装置」としての「日常人間」に化身しているのである。日常は情性態と化し、その内部での自己認識は、繰返される「同じこと」の中で「オートマチック」に陥り、ついにその本質を発見できず、また自らそこに意味を与えることがまったく不可能になっている。このような状態の中では、考えようとするものが即ち、からの観念的逃避となり、あるいはこのような生活の一面を主観化することによって、その苦痛を治癒しようとする傾向が支配的となるのは当然のことかもしれない。しかし、われわれの現実的な姿としての日常生活を否認するところに「人間性」を見い出し、あるいは日常生活の

情性化への耐えがたい苦痛を観念世界での「幻想的幸福」へと止揚して、そこに主観化された（自己にとつての）「真の生活」を、自己の現実の生活と置き換えてしまう姿勢は、決してわれわれの現実的な疎外を克服しうるものではない。意識は永遠に肉体の束縛から逃れ得ないのであり、われわれは現実的な課題を解決し得ない限り、自己の現実から逃避することによってのみ幸福であるような意識構造と訣別できないのである。

われわれからとつて必要なことは、ルフェュブルの言うように「日常性から出発して、日常的なるものただなかにおいで日常のなるものを乗り超え」ることである。

それはわれわれの現実的な生活過程としての日常生活を「よく見いぬる」ところから出発し、このわれわれの具体的な存在に批判的に認識し、全体的に把握するなからわれわれの存在の意味を、その歴史性を、そしてなによりもこの現状の変革への可能性を探り出すことである。そしてこのことは、われわれの生活を思想化することによって、今日、日常性のすみずみにまで浸透し、自律的な原理とまでなっている入支配<sup>イデオロギア</sup>と対峙する契機を形成するための模案である。以上の主旨のもとに広範な討論の場を設定し、更なる発展を望みたい。

## 現代史のはざままで

### 河本康夫

「すべての世界的な大事件や大人物はいわば二度あらわれるものだ、一度目は悲劇として、二度目は茶番として」

——ルイ・ボナパルトのブルジョアメーデー  
——マルクス

しかし、チユコスロバキアの現代史に眼を向ける時、この言葉は訂正されなければならない。二度目はより残酷な悲劇

時代錯誤が同一の場所でも起きたのである。うか、いろいろな答が得られる。先づもって簡単に済ませようとするならば、場所だ、位置なのだ、というのである。次にもう少しわかったような口がききたければ二つの大きな国際的政治力にすぎまに置かれた小国の運命なのだ、とても言うべきだろう。しかし、この様な一面的な評言は二つの歴史的事件の表面的な類似性のみ眼を奪われたものでしかない。最初にもどって、マルクスのテーゼはナポレオン三世の治世において、唯一、彼が成功を取った政策の検討から導き出されたものである。あの俗物ナポレオン三世が唯一行なった政策とは世論操作と反政府運動の抑圧である。この二つの面をチユコスロバキアについてあてはめるならば、ナチは巨大な世論操作の事例であり、ソ連の政策は反政府運動の抑圧に關して最大限の努力を払っている。国際政治のダイナミズムについてこれ程考えさせる素材は亦とないであろう。

前置きはこれにして、以下に述べる事柄は一九三八年九月になされたナチのチユコスロバキア侵入に関する記録の紹介である。すなわち、ポール・ニザン著『九月のクロニクル』について、現時点における注意すべき点を、三述べてみたい。全ての歴史が現代史であるというテーゼは優れて周到な分析から生まれている。つまり、個々の事実をどう捉えるか、その捉え方こそが歴史であり、その捉え方を規定している最も大きなものはその時代精神であるのだ。彼・ニザンは明らかな歴史観から「ミュンヘン協定の持つ重大な意味に正当な評価を与えることが出来た。彼は時を移さずあらゆる資料を駆使してこのパンフレットを作製した。これ程重大であり、かつ複雑な事件に対して必要な資料をほとんど集めることは先ず不可能である。しかし彼はそれを可能にした。そして、単なる資料集ではなく、優に歴史論文としての要件を満たすだけの問題提起をなしたのである。しか

も、提起する視点が仏共産党が当時有した貧弱な射程距離をはるかに越えていたことは、現在まで新たに加えられた資料をあわせてもその指摘に間違いないことからも明らかである。当時、共産党の公式機関紙の編集者であったニザンは代弁すべき党の考えよりもはるかに先を見ているのである。このことは後の脱党、裏切者呼ばわりとなって彼の名誉を永く裏切つける事件へと連なるが、今はふれない。とにかくマイクより性能のよいスピーカーはノイズを出してしまつたのだ。ここでニザンについて若干の紹介をしておこう。『ぼくは二十歳だった。それがひとの一生でいちばん美しい年齢だなどどだれにも言わせまい。』この有名な冒頭で始まるエッセー『アデン・アラビア』はニザンの青春の証として残っている。サルトルと同級生だったニザンはフランスのエリート中のエリートの集まるエコールノルマルに在籍しているうちに

としてと、この東欧一の工業圏を足下た蹂躪したのは愛すべき同胞だったのだから。一九三八年九月、ナチスドイツはその野望を先づ割譲という形で現わし、チユコスロバキアへの侵入を行った。しかも、英仏両国の同意を取りつけて行ったのである。それ以後のナチの行為については今更つけ加えるまでもない。時は流れ、一九六八年八月、ソ連はその指揮下のワルシャワ条約軍を深夜チユコスロバキアに進めた。今度はその後の政策方針に自らの影響力を保つ、という形で侵入の目的が達せられている。単にソ連の目的がチユコスロバキアに対する支配と、その支配力の宣伝、威嚇に止まっているというだけなので世界戦争にならなかつただけのことで、チユコスロバキアそのもの、その人民にすれば前と同じ、否もつと悪いものであろう。

ならば一体どういうわけかこのよう



ポール・ニザン

自らの行くべき処と受け入れようとして  
いる社会の思惑を見ました。彼等ノ  
ルマリアンはギリシャとラテン文化の遺  
産を受けつぎ、望まれている社会の指導  
者となるべきなのである。フランスで、  
しかも一九二〇年代のフランスにおい  
てはこれ以上将来を約束された青年はい  
ない、というのがエコールノルマルなの  
であり、そこに不満を抱いてパイと出て行  
ってしまったなどということは、全く常識  
では考えられないことである。この考

の両者をはば並行して行なって来たこと  
ろに彼のしたたかな行動力が現われてい  
る。実生活の方は編集者として、中学教  
師としてそれぞれ一応の段階を経た後、  
《ユマニテ》の仕事をするようになる。

——ニザンは《ユマニテ》紙と《ス  
ワール》紙の外交欄執筆者だった。こ  
れ以上に魅力的な職務はない。(中略)  
またこれほど興奮を呼ぶ雰囲気もない。  
世界の誰れよりも早く事実を知り、自分  
の見解を世界に示すことによって、ジャ  
ーナリストは、自分が政治的な事件の検  
閲者になったような、また事件の処理に  
間接的にはあるが参与しているような  
感じをもつ。彼は恐れられ、読まれ、そ  
してまた論評される。(アリエル・ガン  
スプール著『ポール・ニザンの生涯』)  
少しながい引用になったが、彼の地位  
がいかに重要かつ強力であったかを語っ  
ているの引いた訳である。つまり、こ  
のクロニクルとは先づ文字通りの報道、

えられないことがニザンのアダン行きで  
あった。そこでニザンは何を視たのか、  
純粋な経済活動と古きなつかしき敵フラ  
ンスを見たのであった。はっきりと今ま  
での自己と決別してパリに帰ってきたニ  
ザンは着々と自己の武装にどうかかっ  
た。当時のパリにはマルキシズムの講座は一  
つもなかったという。ポアンカレ内閣の  
もとに一九二八年には多数のコミュニニ  
ストが逮捕されるという事件もあった。そ  
うしたなかで彼は婚約し、結婚し、卒業

通信から成り立っているのである。これ  
以上な有利な地位にいる者の手にした  
情報の集積である。次に、年月を経た現  
在の我々の前に当時の情勢を再現してみ  
せる年代記でもある。この二点について  
は別段多くの才能は必要ではないであろ  
う。しかし、最後の意味、この意味こそ  
が、このパンフレットに大きな幅と深遠  
な魅力と恐ろしい力を与えているのであ  
るが、これは何と云って政治的ダイナ  
ミズムの解明であろう。一体何故にチ  
ェンバレンはヒットラーに妥協したのか、  
フランスは他に何かすることがなかった  
のか、もしソ連が・・歴史に対して仮  
定で読み直しを求めるの愚は言うまでも  
ないが、この種の仮説は現在、大変に必  
要になって来ているのだ。特に日本にお  
いては、とりわけ求められているのであ  
る。米ソ共存体制のワクをくずしたくな  
いながらも、アラブの戦火は起りかつ圧  
さえられてはいるのを見ても、中ソ論争  
くすぶり方に細心の注意を払いつつ兩國

論文を書き、そして共産党に再加入して  
本格的な活動を始める。以後『アダン・  
アラビア』を皮切りに『番犬たち』、『古  
代の唯物論者』等の哲学的エッセーを出  
版してゆく。これ等の著作はマルキスト  
としての彼の成長ぶりとなぜ彼がマル  
キストにならねばならなかったかを物語  
っている。一方、『アントワヌ・プロ  
ワイエ』、『トロイの木馬』、『陰謀』  
等の小説を書き続ける。この三篇の小説  
は全て具体的であり、何らかの仕方では  
ニザン自身を投影させている。にも拘らず  
極めてシンボリックに階級意識を浮かび  
上がらせている。彼にとつて階級とはき  
ちんと整頓された積木ではなく、一つ一  
つ肌ざわりのちがう人間の日常生活のこ  
となのである。一見私小説的な小説のな  
かに本質的な階級対立を定着させて描き  
きり、抽象論議や観察記録で埋まったエ  
ッセーのなかに自らの人生を決定したフ  
ァクターを浮き彫りにしているのも彼の  
資質から来たことであろう。しかも、そ

からの復讐を受け続けながら、ここまで  
闘い抜いてきたベトナムを見ても、国際  
関係の変化を如何に自らの方針に組み込  
めるかは自らの行為を保障する大きなフ  
ァクターなのである。小状況に対して適  
用するならばより早く、より確実に政治  
的な力関係の変更を可能にした者こそが  
政治を行ってゆけることはいまでもな  
い。政治とは何よりも現実有効性を問題  
にするものであるから、そのダイナミズ  
ムを捉えるということが力を持つことだ  
といえる。

以上のように本書執筆時のニザンは絶  
大な影響力を持っていました。当時のフラ  
ンス、ヨーロッパは迫りくるナチの侵略  
に対して明らかに戦争を準備していたの  
である。そうした背景で各国の政治家は  
如何にして民衆を操作しようとしたかが  
ひとつの公文書を通して明らかにされて  
ゆく。この書物をパンフレットと呼ぶの  
は一見誤りのように思われるかも知れな  
いが、これは明らかにパンフレットなの

である。何故なら冒頭においてニザン自身が断つていように、新聞記者の行き方と歴史家の行き方のあいだの相違点および類似点にかかわるものであったのだから。このように過去の事柄として整理しようとするのでなく、現在起っている事柄を如何に捉えるか、その問題点は何処にあるかをのぞくと読者が獲得してゆくから、資料を編集してつくられていくのであるから、これこそパンフレットそのものである。そして、九月の事件の翌年に早々と出版されている。このことはニザンの執筆動機があくまでも現実政治、当時のヒットラーの動きに対しての抵抗であったことを示している。

一八三八年九月のミュンヘン会談の後、一〇月にはフランス人民戦線が崩壊している。一九三九年三月にはヒットラーがポーミアに侵攻している。

ここで現在の日本の状況に眼を向けなければならぬ。大衆社会化などと

いうわけのわかたような都合のよいカテゴリーは通用しなくなつてから久しい。一切の情報が集中し、そのうち一つとして理解出来ない、というのがコタツに入ってテレビをみて新聞を前にラジオを聞いている横町のオバさんだろう。映像の時代を予見して教育に利用する方法を開発したのはアメリカであるが、日本においてははずれた編集能力をこそ管理するという方法を権力は選んだ。いわゆる編集権はメディアの所有者にある、というテーゼである。マスコミ関係の戦後史に眼をやればその実例はすくんでくる。

取材と報道との間に割り込んでくる経営権によって多くの秀れたドキュメントが間に葬られていった。いくらか多くの情報を得てもその情報が送り手の側でコマ切れにされている以上、受け手の理解は送り手の意図をこえることは不可能に近い。しかも、とてつもなく多くなっている情報に対し、いちいちその送り手の編集意図の再構成などしてはおれないからして

結局は全てを知り、なにも解らないということになるのである。国家の死滅より国土の沈没に興味を持つていられる。

先頃話題になった沖繩海洋博に韓国の労働者を送つては、という首相の発言や、東南アジアの利権を守る上で日本は何をすべきかとの青嵐会の議論は政財界の視点は何処にあるか、ということを示らなければならない。

こうして見てくると古い記録集が何故か一篇の読書録のようにも思えてくる。実際このパンフレットを読み進んでいくなかでの臨場感には妙に冷たい一面があるのである。それは読んでいる自己を見つめるも一人の自己の視線を感じさせるなにか、なのだ。このからくりは一体何かと考える時、エンツェンスベルガーの『意識産業』がすぐに浮かんでくる。彼はあの中ではっきりとした視点のもとにメディアが体制を固定させるためのコ

ンクリートとしてあることを明らかにしてみせた。彼の論旨が明白であることと、実証が的確であることは両輪となつて一直線に読む者をゴールへと導いた。実に爽快な読後感であった。しかし、この三〇年前のクロニクルの方は以後、幾分かの影響を残す。著者の暗い予感が投影しているのかもしれない。

実際、『九月のクロニクル』出版後すぐにフランス共産党を脱党し、一〇月には動員され、翌年ダンケルク撤退中に敵弾により命を落しているのだ。独不可侵条約はスターリンからナチに与えられ

た西側侵略許可書といつてもいいだろう。それにはソ連の当時の軍事力では到底下手を食い止めることは出来ないという裏面があったことも確実である。しかし、フランスにおいては、フランス共産党はフランス人民を指導するには単なるモスクワへならえでは仕方がない、ということとをニザンは指摘して感覚したのだった。このことはニザンの世界観の変遷などというものでは全然なく、その正反對の表明であった。しかし、動揺していた当時のフランス共産党及び知識人にはその真意がさっぱりわからず裏切者キャンペー

ルにすつかり乗せられていたのであった。一九六〇年にサルトルの序文を付して『アデン・アラビア』が復刊された。

——ニザンがやつと理解されるには、彼の書物が彼の生涯の続きが、そしてサルトルの側から、彼の死後二〇年間の経験が必要であった(メルロー・ポンティ)というわけだったのだ。この『九月のクロニクル』にしても未だ復刊されていない。困難な稀覯本ということである。また、翻訳王国日本にいる幸がらわれれば手軽に読むことが出来る次第である。

Mホルクハイマー 久野取訳

# 哲学の社会的機能

## メディアの政治

津村喬評論集

非人間化の進む現代社会において、真に人間の解放をめざした巨匠ホルクハイマー。20世紀思想の極北をなす「社会批判」を、主要な伝統的理論の批判を貫いて、現代状況を鋭く照らし、新しい一頁を残した待望の長篇文庫。久野取訳が同志的翻訳をもつて運びぬいた待望の長篇文庫。 九五円

革命と文化を語るのだが、こんなにもたやすく、困難な時代はない。抑圧的なメディア利用のもとに沈没する商人の首領を否定せず、広告・ジャーナリズム、文学のすべてにわたる文化のテロリズムを正確に分析し、私たちの文化革命の戦略をかかげない明確な形で形成する根拠的評論。 一五〇円



晶文社

東京都千代田区外神田2-1-12  
電話 255-4501

いろいろの方面からミュンヘン協定をつつき回すことは多くの学者がやっていることであり、細かな事実についての発掘もなされている。しかし、一つの方法論のためにこそこのクロニクルは手にされねばならないだろう。現在の日本が極めて多方面にわたる、世界の注目を集め、世界政治、世界経済のなかでしかもらの生活を眺げられないことは石油問題を持ち出すまでもなく明らかなことである。

しかるに、一つ政治感覚においては全く旧態依然とした狭い視野でしか判断が働いていないのはみじめとしかいいようがない。政治の貧困とは単に政治家が馬鹿だというだけのことはない。操作され乍らも世論を形成している民衆の側に多大の責任がある。この操作の媒介をこそ捉えなおしていく作業が政治への参加の第一歩であろう。自己満足的なミニコミづくりを半年やっぴと投げ出してしまような昨年来の傾向には何の意味も見出せない。むしろこのような時に

そ公式な発表の真意を見ぬき自らの政治感覚を養うべきであろう。なお聞くところによるとフランスではガリマール社が『九月のクロニクル』を復刊する予定を発表したらしい。如何なる思惑か、この秀れた問題提起のパンフレットに関しては謎が多すぎる。

著者は大阪工業大学  
かわもと やすお

参考文献

『九月のクロニクル』

ポール・ニザン著作集第七巻・晶文社  
村上光彦訳

『ポール・ニザンの生涯』

ポール・ニザン著作集別巻一・晶文社  
アリエル・ガンスブル著  
佐伯隆幸訳

『シーニュ』

メルロー・ポンティ著  
みすず書房  
竹内芳郎訳

小山仁示／編

木坂順一郎

(一)

大正デモクラシーの研究は、ここ一〇年ほどの間に大きな発展をとげてきた。いまから一〇数年まえ、信夫清三郎『大正政治史』(全四巻)が刊行され、日本近現代史の一つ空白となっていた大正政治史に関する最初の本格的な研究が開始されたときにくらべて、今日の学界の研究状況は隔世の感があるといわなければな

らない。すなわち最近では、政治家の書簡・日記などの文書類や官庁の極秘文書などがつきつきに発掘され、それらの史料を駆使した研究がすすめられる一方、いままでも忘れられていた政治家や社会運動家などの再発見・再評価の動きが高まってきている。本書は、このような研究状況のなかから生みだされた貴重な成果の一つである。

田淵豊吉(一八八二年二月三日生、

## 田淵豊吉議会議演説集 I

哲人政治家の帝国議会での活動

日本帝國主義の現段階  
宇野理論による帝國主義論  
鎌倉孝夫 九八〇円  
宇野経済学の基本問題  
宇野理論への導きの書  
大内秀明 九八〇円  
帝國主義論の史的展開  
待望の帝國主義論史  
降旗雄雄 二二〇〇円  
現代ナチソナリズム批判の展開  
高島善哉 一〇〇〇円  
マルクス国家論入門  
市民社会と国家の弁証法  
柴田高好 二二〇〇円  
民族問題の史的構造  
湯浅勉男 一〇〇〇円  
増補・若き北一輝  
恋と詩歌と革命と  
松本建一 一〇〇〇円  
わが死民  
水俣問題争  
石牟礼道子編 七八〇円  
歴史に何を学ばずか  
人民の運は運はずことはできない  
羽仁五郎・井上清 六八〇円

東京都中央区京橋3-11 現代評論社 振替・東京4419 / 東京(561)8701

これは研究に備する政治家の一人ではないかと思つたことがあつた。しかし他方では、静払つて議政壇上にたち平気で長口舌をふるい、やたらに「議事進行に關する発言」と稱して議長をこずらせている「仙人」「奇人」という印象が強、田淵についてそれ以上深く研究することなく時を過してきた。ところがはからずも本書に接し、私はかつて直感的に感じていたことが正しかつたと思つたから、「仙人」「奇人」というジャーナリストイックな評價がいかにまちがつていたかを知り、不明を恥じたいのである。

## (二)

本書は、満三八歳の田淵が新進黨の代議士としてはじめて衆議院に列席した一九二〇年六月の第四三議案から一九二四年一月の第六八議案までの期間における彼の衆議院での発言のすべてを、各議案ごとにとまとめて収録したものである。

そして本書の最大の特徴は、単なる速記録の収録にとどまらず、參議院議員戸叶武氏の序文と、編者小山仁示氏の筆になる「田淵豊吉について」と題する評伝および各議案ごとの解説がつけられていることである。しかもそれらの序文・評伝・解説は、きわめて懇切丁寧かつすぐれており、読者はそれらの文章をよくむとにより、田淵豊吉の思想と行動のアウトラインをたゞどころに理解することができであろう。そこでまず戸叶・小山両氏の文章を紹介しよう。

戸叶氏は一九歳から二五歳までの青年時代に早大教授・大山郁夫と大隈寛の先輩・田淵豊吉から親しく指導をうけ、妻の里千代代議士から「あまりにも強く田淵仙人の影響をうけている」(序文八ページ)と評されていた人である。戸叶氏は、序文のなかで田淵を「予言者の哲人政治家」とよび、「田淵哲学の理論と実践の狙いは、古代ギリシヤ時代以来の政治哲学上の課題たる。賢人政治と民主政治の調和

の実験にあつた」といい、「人民の代表として、当時の官僚軍閥の勢力を基盤とする政府に向かつて果敢なたいを「行い」、「独立独歩、不撓不屈、如何なる難関にも屈し」なかつた点において、田淵は田中正造に比すべき人物であると評価している(同一二ページ)。

これにたいして小山氏は、田淵が「権勢にあくまでも抗して孤豊を守り、ひたすら理想政治を追求した」政治家であり、「田淵豊吉について」(九ページ)、彼の「政治と行動は「激しい反骨精神」(同一二ページ)と、「人間みな平等」の精神」(同一七ページ)に「つらぬかれていたことを指摘し、最初は本書のタイトルを「自由主義者の帝國議會での活動」とするつもりであつたが、田淵をよく知る人びとに会い調べていくうちに「単なる「自由主義者」という表現では田淵をなみの政治家と同列視してしまふことに、私は気がついたので、あえて副題を「哲人政治家の帝國議會での活動」としたと

のべている(同一九ページ)。つまり大時代の田淵の親友・益子達輔氏によれば、「田淵は権力をあそばさず、真実、いや真理をあらそつた政治家だつた」のであり、戸叶氏によれば、「田淵は真理をあらそつて権勢に抗したのだ」という(同一九ページ)。このような評価は、無所属代議士として孤立無援のまま発言の機会を封じられた田淵が、戦時議會にあつて勇敢にも政府を弾劾したおし、たびたび議長から退場処分をうけていた姿をみると、まさにそのとおりだという感じがする。

## (三)

すでにのべたように、小山氏によるすぐれた評伝と解説がつけられているので、私が田淵について論じることは屋上屋を架すことになるが、あえて本書をよんだかぎりで大正後半期の田淵の思想と行動の特徴を示せば、つぎのようである。

まず演説や発言のスタイルについてであるが、帝國議會の速記録をたねんによむとは、かなりしんどい仕事である。演説や発言の論旨が明快かつ簡潔であればともかく、田淵のように「論点が次から次へと移動し、博学な知識を駆使しつつ、論理が常に飛躍し、文体的文法的にはとことつていないのが、田淵演説の特徴である」(本文五ページ、以下ページ数はいずれも本文本)、「というのであるから、論旨が明か、簡明瞭なため、ちよつと聞きのがすと論理のはこびがわからなくなり、取材の新聞記者がよく泣かされたといわれているが、それにくらべると田淵の演説はその対極にあるものといえるであろう。しかも彼の演説は、大意即妙の受答え、弥次にたいする応酬、人をくつたような発言、本旨からの脱線ばかりでなく、やたらに英語を連発してなみいる議員を煙にまき、しまいは響長から「田淵君、成ルベクドウカ外国語ハ無クシテ

……」(同一三ページ)と注意されるなど、そのやりとりのおもしろさという点ではまさに天下第一品である。その彼がときには酒を飲んで登壇し、水をぶがぶのみ拳闘をふりまわし、テーブルをどんどんとたたきながら紀州弁丸出しの熱弁をふるい、議場に笑いと混乱の渦をまきおこすのであるから、これはまさに帝國議會の奇観であつたに相違なく、好奇心にみちたジャーナリズムに恰好の話題を提供するものであつた。読者は、「おそらく本書を一読しただけで、彼が「仙人」「奇人」と称されたことの意味を理解されるであらう。

ところで本書にみられる田淵の内政改革論の最大の柱は、なんといつても普通選挙論である。彼は、第四三二四七議會において毎回普通選挙断行を力説しているが、その普通選挙の根拠づけはきわめて多様である。たとえば、(一)「國民皆兵」徴兵制下では普通選は当然である(四四ページ)、(二)「國際的に人種平等を主張しながら



普選を拒否するのはおかしい(一五ページ)、(三)ドイツ・イタリアに社会主義革命がおこらず、ロシアでおこったのは普選を実施せず「圧迫政治」をつづけていたからである(四一ページ)、(四)現政府はわずか三〇〇万の有権者を代表するにすぎず、国民を真に代表していない(四二ページ)、(五)国民に政治参加の機会を与え、「愛国心ヲ養成」し、「國民ニ自覺的能力」を発揮させるために普選を断行せよ(四二ページ)、(六)「恒産ナキ者ニ恒産ヲ与え、恒心ナキ者ニ恒心ヲ与へルト云フノガ普選ノ根本的精神デアアル」(七一ページ)、(七)労働者の生活を改善し、労資の対立を非暴力的、法律的に解決するためには普選が必要である(七七・八三ページ)、(八)普選を実施し「内ニ対シテハ社会上ノ不安ヲ防キ、外ニ対シテハ外国ニ対抗シ得ルト云フ基礎ヲ造ツテ置カナケレバ、我が日本帝國ハ危ク」(八三ページ)、(九)普選により「日本ノ國民の安定ト安

心立命ト与へテ、而シテ此明ルイ所ノ日本ノ帝國ヲシテ、益々個人ノ幸福ノ上ニ於テモ、國家社会ノ協調ノ上ニ於テモ大ナル文明ノ域ニ進マシメテアルナラヌ」(四〇ページ)などである。

しかしそれ以上に彼の普選論の核になつていたものは、「普通選挙ト云フカニ依ツテヤラナケレバ、吾々民論ガ政權ニ官權ニ対抗スルコトハ出来ナイ」(七六ページ)という抵抗権的民権擁護の思想であり、「普選ハ先強リ私闘西革命ノ自由トナ、或ハ平等トカ博愛トカ云フ所ノモノカラヤッテ来タ」(三〇ページ)という歴史認識であつた。したがつて彼によれば、「普選ト云フモノハ要スルニ此『デモクラシー』ノ『マーチ』デアアルト思フ、『デモクラシー』ノ『ツ』進行ガ即チ普選トナツテ現レテ来タモノ」であり(二三四ページ)、そのデモクラシーの本義とは「平等ト云フバカリデナイ、弱者ヲ助ケテ之ヲ平等ニ建シテ之ヲ迎ヘテ行クコト」である(二六一七ページ)

ということになる。そしてこのようなデモクラシーにたいする憧憬をいだいていた田淵なればこそ、口ぐせのように、ポルシェビズムを恐れるな(四三ページ)、これを恐れ小さくなつて困るというのは「維新ノ一開國進取ノ図是」を忘れるものであり(四二ページ)、「是等ノ主義思想ニ対シテハ思想ハ思想ヲ以テ戦ハナケレバナラス」「思想ヲ発表ハ自由ナケレバナラス」(一九四ページ)と力説してやまなかつたのである。

要するに田淵の普選論は、米騒動以後の政治状況のなかでは、保守的な革命的安全弁的普選論や革命的な階級闘争的普選論とは異なつた自由主義的な小ブルジョア的デモクラシーにもとづく普選論の一典型であつたのである。

このような普選論のほかに、田淵は女性の政治参加を主張し、議長、副議長の党籍離脱を提唱し、衆議院規則改正による少数派議員の発言制限にたいしては早大同窓生の中野正剛とともに抵抗し、さ

らに社会政策の充実や相続税の累進課税化など多様な主張を展開したのであつた。

外交問題に関しては、田淵はシベリア出兵を批判し、尼港事件に関する政府の政治責任を追及し、軍閥官僚の秘密外交を痛烈に批判するとともに、保友・中野が提出したソ連承認決議案にたいする擁護射撃をし、「日露が接近シテ、此大國ガ直ニ提携シテヤルト云フコトハ、後三十年ノ後ニ於テ大ナル影響ヲ画クトモ思ヒ

マス」(一四七ページ)とまさに予告者の発言をおこなつたのである。

しかしなにもましても重要なことは、田淵が中国・朝鮮問題についてすぐれた主張をおこなつたことである。まず彼は、一九二三年三月の第四六議会在「在支公使館ヲ大使館ニ昇格スルコトニ關スル建議案」をみずから提出し、日中関係が対英米ソ關係とならんで重要なものであることを指摘し、公使館を大使館に昇格させる、閣僚級の人物を大使に任命して「日支ノ親善提携」(一五一ページ)に努め

るべきであると力説した。

ついで彼は、二三年九月の関東大震災のにおりにひきおこされた朝鮮人虐殺事件をとりあげ、「私ハ内閣諸公ガ最モ人道上悲シムベキ所ノ大事件ヲ一言半句モ此神聖ナル議會ニ報告シナイデ、又神聖ナルベキ善ノ諸君ガ一言半句モ此点ニ付テ述ベラレナイノハ、非常ナル憤慨ト悲ムヲ有スル者デアリマス。(中略)朝鮮人デアルカラ宜イト云フ考ヲ持ツテ居ルノ

デアルカ、吾々ハ悪イ事ヲシタ場合ニハ、謝罪スルト云フコトハ、人間ノ礼儀デナケレバナラスト思フ。(中略)……日本國民トシテ吾々ハ之に向ツテ相当朝鮮人ニ対スル陳謝ヲスルカ、或ハ物質的ノ救助ヲナスルトカシナケレバ、吾々ハ気が済マヌヤウニ私ハ考ヘルノデアル」(一九二一三ページ)と演説したのである。

大正デモクラットの多くの如く、内政問題についてはかなり進歩的な発言をしても、この中興・朝鮮問題になるとろくなことをいわないという当時の一般的状況のなかでは、この田淵の発言は「東洋經濟新報」の三浦鐵太郎や石橋湛山の帝國主義批判論とともに永久に記憶されてよい卓越した主張であつたのである。

しかしこのような田淵も、小山氏が正しく指摘しているように、部落問題にたいする本質的理解を欠いた差別発言事件(二三年の華族会館事件)をひきおこしたり、ベルサイユ・ワシントン体制のもとで日本は英米の圧迫をうけているとの



危機感にさせられつつ、日本は英米とならぶ世界の三大国にならなければならぬという日本大論を抱懐していたことを見落してはならない。そこに彼の限界が示されていたからである。

しかしそのような限界があったにせよ、大正後半期の田淵は、社会の民本主義的風潮を議会に反映させるために奮闘した議会内最左派の一人であり、反骨精神で徹した鋭腕的な小ブジョア・デモクラシーの体現者の一人であったといつてよいであらう。

#### (四)

私は、田淵の演説集が一日も早く完成することを願っている。一つには、私が昭和期の彼の活躍ぶりを早く知りたいと思っていることにもよるが、それ以上に本書の完成を契機に田淵研究が大いにすむことを期待しているからである。

今後の田淵研究は、第一には戸叶氏や

小山氏によって「哲人政治家」と評された彼の「哲学」がどのようにして形成され展開していったのか、その「哲学」はどのような論理構造をもつものであったかなどの問題を解明することが必要であらう。さらに第二には、彼の議会外の活動の模様を明らかにすべきであり、そのためにはもし彼が日記・手記・書簡などの史料をのこしていれば、それらの文書を発掘整理することがぜひ必要となるであらう。そして第三には、田淵研究の総仕上げとして、日本近現代史上における田淵の歴史的役割とその位置づけがなされなければならないであらう。

私が本書の完成を期待するもう一つの理由は、田淵研究の深化を契機に大正デモクラットの一群に属する政治家たちの研究がすすむことを願っているからである。ちよつと思いつくだけでも松本君平・田川大吉郎・浜田園松・斉藤隆夫・永井柳太郎・中野正剛・清瀬一郎らの名前が頭にうかぶ。

ともあれ戦後三〇年近くたった今日、戦後民主主義の再評価が叫ばれ、また中国・朝鮮・ソ連をふくむアジアやアラブと日本との関係をどう設定するかがいぜんとして重要な国民的課題となっている現状をかえりみると、軍閥層による国内外にわたる反動支配に抗し、政治の民主化と、アジア諸民族と日本国民との友好親善のために関心した田淵豊吉の再評価がおこなわれることは、まことに意義のあることだといわなければならない。多くの読者が本書を一読されることを切望するしだいである。

（評者は龍谷大学・法学部教授  
まさかじゅんいちろう）

## 別冊法学セミナー〈季刊〉 基本法コンメンタール

〈全14冊完結 重刷出来〉  
債権法 民法Ⅲ 親族法・相続法 民法Ⅰ（総則・物権法） 民法Ⅱ（  
為、有限会社法） 商法Ⅱ（会社法） 商法Ⅲ（総則・商行  
切手法） 刑法 労働法Ⅰ（閉鎖法Ⅱ） 労働法Ⅱ（労働基準  
法） 民事訴訟法 刑事訴訟法 教養法 借入金法

## 基本判例シリーズ

〈3月現在既刊〉憲法Ⅰ 和田英夫編・七四〇円 民法Ⅰ（総  
則・物権）／中川・榑・石田綱・八〇〇円 民法Ⅲ（親族・  
相続）／中川・榑・石田綱・八〇〇円 裁判／民法Ⅱ（債権  
以下商法、刑法等）主要法域についての判例を体系的に解説

法学セミナー・増刊

セット価三〇〇〇円

## 現代法学事典（全4冊）

法学セミナー・増刊（隔月刊）

## セミナー法学全集 全16冊

経済学学習に最適な参考誌（4月刊・隔月刊）

## セミナー経済学教室 全14冊

マルクス経済学 経済学史 経済政策 国際経済 現代産業  
現代金融 近代経済学 日本経済 寡占経済 国家と経済  
自治体と経済 労働と経済 現代資本主義 社会主義経済  
の各巻たてに従い第一線の執筆者が平易に講義をする入門誌



北村透谷

# 北村透谷小論

田中孝夫

## 第一章―透谷の遺産

自由民権運動からの挫折。熱烈な恋愛。評論家、キリスト者としての活動。そして自殺。誠実を尽くして生きた透谷は、明治中期の奈落とその崩壊の深さの大きな意義を読み取っていた。透谷の死後、鴉片藤村の言葉を借りるなら「その惨憺とした戦いの痕には、拾っても拾っても尽きないような光った形影が残った。彼は私と同時代にあつて最も高く見、最も遠く見た一人だった。そして私達の為に、早くもいろいろいな支度をしていてくれた」のであり、透谷はその短い激烈な生涯のうち、ありとあらゆる問題を提起している。すなわち私達は透谷の中に、宗教詩人、社会主義詩人、ナショナルリスト、キリスト者、あるいはまたロマンティックな恋愛詩人等、ありとあらゆる可能性を見ることが出来る。しかし透谷の自殺は、誠実を貫いた恋愛も、そこから出発した結婚生活も、評論家・キリスト者と

しての活動も、提起した様々の問題も、一切を疑問として此の世に残した。この意味において、透谷の自殺は明治二〇年代の挫折の象徴であり、透谷の情熱にあふれた意義深い生涯も結局失敗に終わった戦いだったのかも知れない。だが透谷が私達につきつけるのは、「提起した区々の問題よりは、問題の提出の仕方であり、時代の情況との対決にある。その情況との対決の緊張をどこまで持続できるかが一番肝心な問題」（桶谷秀昭）だということにある。だから私達は、透谷の思想が明治二〇年代の社会に果たした役割のみを問題にするだけでは充分ではなく、むしろ透谷が恨みをこめて持ち込み、その墓場からあふれ出た光り輝く余剰の断片をこそさぐる必要があるのである。

透谷は戦後になって始めて本格的に研究され、評価された。それは、政治から文学へという転向文学者の像の先駆者として、透谷がとらえられたからである。しかしそれらはいずれも詩的言語へ

の洞察を欠き、たんなる挫折の批判に終わった。これに対して、「その作品が示す観念世界の暗さ、深さ、国民把握の先験的ともいえる生命的深さは、矛盾分裂のかたちながら実は見合っているであろう」（平岡敏夫）というように、色川大吉、平岡敏夫等、ことに桶谷秀昭は、政治から文学へという政治と文学とを同一平面でとらえる観点には立たず、むしろ透谷の思想の根拠地を訪ね、透谷の読み取った奈落の意義を評価し、そこから透谷再評価論を構築しているように思われる。

前引用の平岡敏夫の指摘は、佐藤春夫が「彼の所謂、内部生命的理想主義は明治二〇年代に対してそれ自身が文明批評であったのである。当時の巧利万能的社会及び余りに外面的な写実のみこととする文学に対して透谷の持ち出したこのるの文学は、僕の目には誠に正鵠を得た一つの立派な文明批評であると思われる」という意味において、透谷の思想はその

## 第二章―透谷の中心思想

透谷は彼の唯心的傾向の頂点として、「内部生命論」に至る。そして「内部生命論」以後の透谷は、彼自身の理性と靈性を熱意をもって自由に働かせ、自らが同時に原因であり結果であり、主体であり客体であり、催眠術師であり夢遊患者である、純一無雑な幽遠の境を逍遥遊

していた。

### ① 透谷と恋愛

「恋愛は人世の秘録なり、恋愛ありて後人世あり、恋愛を抜き去りたらむには人生何の色味あらむ」（厭世詩家と女性）という透谷の恋愛は、単なる遊戯でも快楽でもなく、生命のやみがない要求であり、生命（霊と肉）と生命とが相抱き、共に向上する生命の燃焼なのである。生命を宇宙の絶対の実在であると思ひ、恋愛を生命の最高の顕彰であるとする透谷の恋愛は、したがって生命への信仰であり、内部生命へと向けられた熱意の放射即ち神と合体せんとする意志なのである。透谷が「思想と恋愛とは仇讐なるか、安んじ知らむ、恋愛は思想を高深ならしむる慈母なるを」（厭世詩家と女性）と書く時、透谷の恋愛は、価値の問題ではなく存在の問題である。それは、思想は自己の所有した思想であるゆえ、それは畢竟所有であり、価値の問題である。これ



を知る」（厭世詩家と女性）と書いてい

### ② 透谷と内部生命

透谷の内部生命は、インド教養我一如のアートマンのような絶対的イデア、またヤントの主客総合された純理を實際問題の上に打ち樹てんとする所に生まれたものである。内部生命は、「心に宮あり、宮の奥に他の秘宮あり、その第一の宮に人はの来たり纏る事を許せども、その秘宮には各人々に之を縫して容易に人を近かしめず……第二の秘宮は常に沈黙して無言・蓋世の大詩人といえども之に突入するを得せしめず（各人心宮内の秘宮）」という「各人心宮内の秘宮」の「第二の秘宮」あるいは「最後の勝利者は誰ぞ」の「調実」と等置できるであろう。だから内部生命は「終に勝たず終に敗れる者は真に勝つものにあらざるを得んや。故に曰く最後の勝利者は調実なりと、調実、言を換ゆれば真理、再言すれば基督」（最後

の勝利者は誰ぞ）であり、透谷には内部生命そのものがすなわち宇宙の精神であり、イエス・キリストであり、したがって信仰の対象となるのである。

内部生命と宇宙の精神との感應関係を説く透谷のインスピレーション論（「内部生命論」中の）は誤解され易い（例えば小田切秀雄の「北村透谷」）が、インスピレーションを受くる高揚または緊張は、人間の生活者としての思考や行為の聖化の中でこそ生まれること、つまり現実生活とインスピレーションの感應能力とは相関関係にあり、現実界とは内部生命の派形であることを説いたものである。このことは、「絶対的にイデアなるものを研究するは形而上学の唯心論なれども、そのイデアを事実の上に加ふるは文芸上の理想派なり」（内部生命論）「トルストイ伯は理想派詩人にあらず。彼は理想を抱ける實際派なり」（トルストイ伯）にも明らかであり、インスパイアドされた透谷は、生命の眼をもって万物を

対して存在は、自己の所有ではなく、自己の存在を存在にたらしめる絶対的な存在によって存在する。この絶対的な存在に自己の全てを委ね、信頼すること、これが神へも人へも愛であり信仰である。透谷はこの絶対的な存在を自己の内部に認め、それを神、すなわち内部生命とし

見、絶対的イデアを日常の事物に接合し、保持せんとするのである。いかに高きイデアといえども抱かれるのみならば、それは未だ何者でもなく、それが実行に移され、日常の事物に保持されて価値あるものとなるのである。透谷の内部生命はイデアに充ち充ちてはいるが、それはさらに多く存在に関与したものである。だから透谷は常に現実を離れることなく、唯心論を實際問題の上に打ち樹てんとした。つまり透谷はたんに唯心論者にとどまらず、完璧な理想主義者たらんと欲したのである。

### ③ 透谷と熱意（エロティズム）

「熱意」は未完の論文「内部生命論」の補足として書かれた。熱意とは「人間も亦心意の平衡を回復せざる限りは、熱意といふ不可思議な力を絶つこと能はざるなり。必ずしも到着せんとするところを指せる一種の引力なり」（熱意）「情は一種の電気なり。之があるが故に人は能く

活動す」（桂川を評して情死に及ぶ）であり、私達は心靈の不平衡ゆゑに熱意をもち、行為をもち、また不幸をもつのである。しかしそれは、野の花や草が動かすおすから天國の面影をしのばせるように、私達は心靈の平衡を回復し、もはや必要のない不動の福樂の園に到達せんがために、不幸をもつのである。すなわち「熱意は結局を脱んで立てり、熱意の終わるところは結局にあり」（熱意）なのである。人間は本質的にエロスの存在であり、自己のエゴを拡張せんとする願望をもつ側面と共に、自己を否定し尽くすことによって逆に充足感を獲得しようとする側面をもつ。後者は「死に至る程に生を求めること」（J・P・タイユ）すなわちエロティズムであり、後期の透谷には「熱意は往々にして己を離れ、身を軽んじて他の為に犠牲にならしむる事あり」（熱意）「熱意」は「桂川を評して情死に及ぶ」などでは、エロティズムがその

「ゴスありき」と置き換えるならば、ロゴスには集めるという意味があり、言葉となった（之を以ていさかその心を形状し之を以てその意を言はしむ）万物の声は、存在者を集め、共同にもたらず。それゆゑ、万物の声は常に響き合い、對話しあつて世界を現成するのである。つまり透谷が「情及び心一々其軌道を異にするが如しといえども、要するに琴の音色の異なるが如くに異なるのみにして宇宙の中心に懸ける大琴の音色の音たるに於いて均しきなり。個々特々の悲喜及び悦楽、要するにこの大琴の一部分のみ」（万物の声と詩人）と書く時、ロゴスの愛肉したものがイエス・キリストであるように、内部生命から発するその声が響き合い、万物となつて世界を現成するのである。万物の声を聞いた透谷は一切の人間へ、万物の相似である造化の最奥即ち内部生命へ「帰還し、現実界は内部生命の派形とされ、ここに現実界にも、富めるも貧しきも、高きも低きも、澄めるも汚れるも、皆相等しい大平等の法則が打ち樹てられるのである。

（筆者は四八年度社会学部卒業）  
たなか たかお

評論の中心にすえられるのである。「人間は道義的生命の中心として愛を有つと共に、感情的生命の中心として熱意を有つ」（熱意）と透谷が書く時、「一粒の麥、地に落ちて死なば唯一つにて在りなん。もし死なば多くの果を結ぶべし、（ヨハネ伝二二・二四）という聖句は、愛（エロス）、愛（アガペ）、愛（ソフィア）の三位一体を最も鮮明に示し、愛と熱意とが結婚し、その眞の靈的意義を現わすのである。それは「自己という柱によりかかちて、われ安し、われ樂しと喜悅するものは常に枯木なり、花は咲かず、実は茲に熟せず」（桂川を評して情死に及ぶ）というよう、熱意のない思想は、あらゆるものに虚無を見、靈肉を区分し、また愛と智を区分し、したがつて花を咲かすを熟することはないのである。このように透谷の思想の中心には、熱意あるいは情がすえられ、その両横に愛と虚無とが並んでいるのである。

④ 透谷と万物の声

透谷が傾倒したバイロンの「人は聞く耳をさへもつてゐるならば、あらゆるものなかにみな音楽がある」という言葉通り、透谷は万物の声を聞いている。透谷の聞いた万物の声は、ギリシア人の聞いた「天体の語言」が自然の声であつたよりも、さらに多くイデーに關与したものであり、透谷の万物の声はそこにとどまらず存在に關与したものである。「おはれ、この至妙なる調和より万物皆な成る一種の声を放ちつつあるにあらざるや」「造化は寄しき力を以て、万物に自からなる声を発せしむ、之を以てその情熱を語らしめ、之を以てその意を言はしむ」（万物の声と詩人）に見られるように透谷の万物の声には、根源的な直接に生命と關わりをもつ力がある。いわば透谷の万物の声は存在者（万物）に存在をもたらず作用を果たしているのである。前引用の「至妙なる調和」また「造化」を、ヨハネ福音書一章一節の「太」に口

子母澤 寛著

勝海舟

激動波亂の時世にあつて、独立を恐れず、自らの信念を貫き通した巨人勝海舟を中に描く壮史を幕末史。

日本經濟事典

中山伊知郎 編  
篠原三代平

埴谷雄高評論選集

全三卷 立石 伯編  
講談社



流する事により存在し得るものであり、自然の変化も自らの変化も同時である、と言うのである。また、自らを、あらゆる透明な幽霊の複合体、と言ふ事により、歴史の重みを感じ、ひかりはたもちその電燈は失われ、と言ふ事により、自らも歴史に参与するといつて自負を表わすのである。つまり、大河としての歴史を見たならば、彼は、数多くの霊により河が構成され、その河が彼を形成する、そしてさらに、彼を形成した河を彼の霊がより以上の河に形成する、というのである。河という歴史が彼を形成させ、さらに彼が河を形成する、というように、歴史と彼は、常に交流しているのである。因果、交流電燈とは賢治自身であり、歴史でもあり。

同時に、この『序』の中に仏教における無常観がある。絶対は無く、全て相對により存在するものである、という考え方である。これは、『八前略』けれどもこれら新世代沖積世の／＼巨大に明るい時

間の集積のなかで／＼正しくつされた苔のこれらの言葉が／＼わずかその一点にも均しい明暗のうちに／＼（あるいは修羅の十億年）／＼すてにはやくもその組立や質を委じ／＼（八後略）の部分に見出される賢治は、彼が投げた命題が、他者に真直ぐに受け取られるとは思つていないし、屈曲された彼も、またひとつの彼であると思つていたようである。つまり、彼自身上と読者とは、常に相對的のしか存在しないわけである。

賢治の自己規定は、禁欲にも表われている。仏教が基底になっているであろう禁欲は、彼を自然の内に置く事に役立っていたであろう。彼は、意識的に禁欲し、性欲を自然の内昇華しようとした。筆者は、賢治が行った禁欲は、彼の作品を字宙まで昇華させた原動力であった気がす。頭腦だけの働きによる作品ではなく、肉体の動きを伴い、本質的なうめきさみ発散させる作品は、何らかの欲望を殺す事によつてのみもたらされる気がす

る。賢治の場合、それが禁欲であったように思われる。しかし、彼は晩年、この禁欲の成果を認めていないような発言をしているが……。

賢治の生家は、土地の名家であった。彼は、名家の息子という農民の眼が、相違いやであつたようだ。エリートたる事を嫌悪していたようだ。こうした、ある種のうしろめたさは、『春と修羅』に見られる。「八前略」草地の黄金をすきてくるもの／＼となくひとのかたちのもの／＼けちをまとひおれを見るのか（八後略）ほんとうにおれが見えるのか（八後略）彼の周りの農民たちの冷やかな眼に対する反発と、自らの内に在る修羅に対するもつて行き場のない怒りの発散が見られるこの八ほんとうにおれが見えるのか（八後略）といううしろめたさの屈曲した激しい叫びは、第三集になると、あきらかに似た言葉で語られる。それは、彼自身が農夫になり働いたにもかかわらず、どうしようもない何かを感じたからかもしれない。

これは、次に記す『作品一〇八番』で語られる。「土も掘るだろう／＼ときどきは食はない事もあるだろう／＼それだからといつて／＼やっぱりおまえらはおまえらだし／＼われわれはわれわれだ／＼……山は吹雪のうす明り……／＼なんべんもきき／＼いまもきき／＼やがてはまったくその通り／＼まったくそうしかできないと／＼……林は淡い吹雪のコロナ……／＼あらゆる失意や病気の底で／＼わたくしもまたうなづことだ」この作品は、生来の農民と賢治との壁を語つたものであろうが、それ以上に、逸つた肉体を持たざるを得ない人間の生の本質的な哀しさを語つたもののように思える。いくら愛し合つていても、いくら語り合つても、抱き合つたとしても、どうしても越えられない壁があるといふ事だろうか。それにしても『春と修羅』における激しさが消えている。この時期、彼は、失意のもとにあつたのだから。『札幌市』においても、彼は嘆く。「遠くくだれる灰光と／＼重んだ町の

広場の砂に／＼わたしはかなしさを／＼青い神話にたまきちらしたけれど／＼小鳥らはそれを啄まなかつた」前述したように、彼は、自然児であろうとし、自然児であつた志向を持ち、数々の欲、立場をひきずつていける人間は、素直な反射を示してくれない。そうした寂しさ悲しさを、札幌の言う修羅を背負う事の苦しさを、小鳥をいかに異郷に立つた時、小鳥らはそれを啄まなかつたといふ深い嘆きとして吐かれたように思える。それにしても小鳥さえも彼を拒否する、といふ心の痛みは、どれほどのものであろうか。

しかし、この時期、賢治の作品の中でも高く評価されている『野の師父』や、彼のやさしさが一杯に表われている『桶作挿話』『留守所にてスケトンを覗き』も書かれているのである。彼が雄偉地人協会を設立し、自らの身体を酷使した時期である。賢治は、三八才で他界した。彼は常に、

行動的であり、自らを律する事を優先させた。そして、自らの意志を出来得る限り実行した。その為、両親に逆らう事も多かつたようである。『ああ今日ここに果てんとぞ』において、彼は、両親に不幸をわびている。

彼は、本質的なやさしさを持つ人間だつた気がする。それも安っぽいヒューマニズムなどではない。自らを律し、他者の愚かさや堂々と語る事の出来る人間であつた。根柢し草で持たなく、大地に根張つた本当の強さを持つ人間であつた。

「眼にて云う」  
だめでしょう  
とまりませんな  
ゆうべからねむらず血も出つづけるも  
んですから  
そこらには青くしんしんとして  
どうも間もなく死にそうです  
（八後略）  
著者は大工大・電気工学科四回生  
（むらかみ じゅんいち）



# ビートルズと 対抗文化

カウンター・カルチャー

中 農 晶 三

(I) パッハとビートルズ

ぼくは音楽のことほしらない。機嫌でいうのではない。ほんとうにほしらない。ただしパッハだけは別である。だががなんといおうと、我流で愛好している。あのパイオルガンの「ビオビオ……」と鳴る音、チェンバロの「……………」(この音、文字では表現不可能)を聞いているだけで、朝まで生きていられる。日常の時間が消えて、生きていられることはぜいたくだ。そのぜいたくさを、パッハが与えてくれる。

なんだろうと思う。わからない。くだらない人間の頭でわかるほどの「白鳥の湖」ではない。この瞬間はひとは伝えようがない。「ビオビオビオ……」としか伝えようがない。

パッハのオルガン曲を弾いた天才はふたりいる。シュバイツァー——アフリカの聖者といわれた——と、バルビヤ。ぼくはバルビヤのほうが好きだ。ご承知の

のように、バルビヤは盲目である。盲目だろうとなんだろうと、なんということはない。しかし、バルビヤが最初にパイオルガンのキイに手をおろすとき、いつもぼくは同じレコードをかけて、ドキッとする。あやまたず、どうして彼は、しなやかな指を鍵盤に探り当てたのか。

これは俗人の俗の考えであるが、まずぼくはそれと思う。思ったとたん、あの流麗華麗、とも、いのち、とも、ミカロコスモス、とも、ぼくたち、とも、あなた、とも、ショウゾウ、イン・ザ・スカイ、ウイズ・ダイアモンド、とも、流れて流れて、たちまちぼくの体内は、パッハで満ち満ちてしまっ。

もうひとつ、ぼくの気に入りの音楽がある。ビートルズ。これもまったく我流で愛好している。たしか指揮者であり、チェロの名手でもある渡辺隆雄氏の息子さんだっと思うが、最近ヨーロッパの音楽修業から帰ってきた若い指揮者が、新聞のインタビューに答えて、好き

な音楽としてパッハとビートルズを挙げている。その答えを訊くとたん、ぼくは「これは大物になる」とひとりうなずいた。だいたいぼくは、自分と同じ氣質をもつひとを、よしとする悪い癖がある。その癖を承知の上で、なおかつこの感覚はよいと断定した。彼が日本でタクトを振るときには、いの一審に駆けつけて、下手でもなんでも盛大な拍手を贈ろうと心に決めている。

音楽について語ることはむずかしいし、またむなし。だから音楽評論はとつまらぬものはない。ことばで語れるものなら、最初からことばで語らう。人間と社会の中にある感性、情感のことばで語りえない部分が、音の粒となつてはとばしり出る。それが音楽だ。それをもう一度ことばに翻訳するのは、徒勞もはなはだしい。

そういつてしまつては、身も蓋もなくなるし、さいわいにビートルズの音楽には歌詞がついているので、その歌詞を

手がかりにして語つてみたい。といつても、ビートルズの歌詞の意味を理性的に解説してもはじまらないので、手当り次第に歌詞の中から、ビートルズらしいことばを拾つてみることにする。

「ぼくの開かれた心」「オール・トゥギャザー・ナウ」「LOVE」「ぼくは十字架に掛けられかねない」「カム・トゥギャザー」「ぼくは、あなたはお、あなたがぼくであるように、ぼくたちはみんないっしょ」「ぼくは泣いている」「ぼくはあなたを自覚めさせたい」「あなたにたくさんの淋しい人たち」「きみはYES、ぼくはNO」「できることなら助けしてほしい、ぼくは沈んだ気分なのです」「悲しい歌を悲しくなくするのだ」「なにものもぼくの世界を変えたりはしない」「必要なのは愛だけ」……ピックアップすればきりがないので、いま頭のなかで浮んだものだけでやめておく。ビートルズを愛したところのあるひとなら、これらのことばの断片を聞いただけで、



あのロックンロールのリズムが、ときには狂おしく、ときにはしんみりと、ときには悲しげに高鳴るのが、心に魅つてくるだろう。

## (II) 開かれた心

ビートルズは、いったいなにをどう変えたのだろう。プレスリーの猿真似から出発したビートルズが、ある日とつぜん変身した。プレスリーが広めたロックンロールという音楽の表現形式は、ビートルズにとってたいへんリアルだった。それまでの音は、アンリアルに感じられたのだ。「現代」を表現するには、ロックンロールとソリアルな形式だった。それに内容を与えるきっかけになったのが、ポップ・テイランだったと思う。

ポップ・テイランも最初は伝統的なフック・プロテストから出発した。そのテーマは衆知の事実である社会問題、すなわち反戦とか、反ポスとか、反搾取とか

ているのは、たいへん素直で、優しい気持ちになるというところだった。道行く他人にも、小鳥にも、名もなき花にも、空の星にも「今日は」「今晚は」と声をかけてまわりたくなる気持だという。

ビートルズは歌っている。「きみはグッド・バイ。ぼくはハロー」と。べつだんビートルズが、マリワナを吸ってこの



いった形で、社会正義を要求した。だがやがてとつぜん、彼の口からジュエル・レアリスティックな歌や、サイケデリックな歌が飛び出すことになる。あたかも従来のバラードでは、人間の心の深層に到達できないと結論したかのごとく、ひとびとの心の奥深いひだをかくいくつて、社会的な対話を試みはじめた。テイランは行動と意識の複雑に絡み合った根元を、探り当てようとするかのごとくであった。大事なはこの時点、変革を志す若者たちの目標が、社会制度や政治の変革をめざすプロジェクトから、自分たち自身や、自分たちのライフ・スタイルや感覚をモデル・チェンジするプロジェクトに、その重心を移し変えたことである。

ビートルズが「ぼくの開かれた心」と歌うとき、まさにそれは自分自身の、自分のライフ・スタイルの、そして感覚の革命の讃歌である。「開かれた心」の前では、「限りのない不死の愛が、百万の太陽のように、ぼくのまわりに輝いてい

る」のだ。だから、いったんつかんだかぎり「なにものも、ぼくの世界を変えたりはしない」夢みるように、そして誇らしげに、しつこいほどのリフレイン「なにものも、ぼくの世界を変えたりはしない」が繰り返される。ときには勝利の響きを高鳴らせ、ときにははうつとりと――。

それはどまどにビートルズが固執する。「開かれた心」の前に現前する世界とは、どんな世界だろう。「開かれた心」と「開かれた心」とは、ほんの「一歩の差であるが、それぞれの世界の距離は地球と金星ほど隔たっている。両者のほんの「一歩の差を詰めるには、キルケゴールの跳躍を必要とする。ビートルズがその間の断絶を跳ぶために、マリワナやLSDの助けを借りたことも事実だが、ビートルズ自身の優しさと強さが、強力なパネになったと思う。ぼくは数人の親しいアメリカ人に、マリワナ体験のトリックについて、根柢り葉柢り聞いてみたことがあつた。すると、彼らの答でひとしく「一致

ではない。

さらに彼らはいう。「ユー・セイ・イエス、アイ・セイ・ノー」君は「イエス」とい、ぼくは「ノー」という場合の「ノー」は、たんなる「いいえ」ではなくて、積極的な否定の意味を含んでいる。それは「open」に対する「close」、如実に示されており。何に對する「ノー」かということ、それは在来文化に對する否定である。在来文化とその根底にある悪しき価値感、かぞえ上げればきりがない。

経済の高度成長とそれに伴う福祉を國家の第一優先目標として――その目標は大企業体制の目標とも完全に合致するのだが――ひた走り走ってきた先進諸國では、個人も、國家と大企業体制の価値感に従って評価される。つまり個人はその所有物の多寡によって評価される。ラジオの所有者よりもステレオの所有者が、オートバイに乗る者よりも自動車の一オーナーが、団地族よりも庭つきの家の持

主が、さらには別荘の持主のほうがえらいとされる。

このような物質万能主義を「ノー」と拒否したが、ヒッピーたちである。ヒッピーたちの祖先は、一七世紀に私有財産の廃止を唱え、一六四九年に共有地の開拓をはじめたイギリス人のグループ「ディイガーズ」にまで、さかのぼることができ、ヒッピーたちはより簡素な生活を志向し、「おれのものはおれのもの、ひとのものはおれのもの」式の質朴な共同生活をはじめた。ついでにいうと「ウイ・ディック・パイロット」という万年筆のテレビコマーシャルがあったが、このディックはディイガーズからきたもので、「掘る」という意味とは別に「好きだ」という若者文化の新しい語意がある。それをさそく適用もしない日本で、コマ・シヤルが登場させるとは、笑止というか、あさはかというか、呆れ果てたものだ。ともかく、「消費者は王様」とか、「消費は美德」とか宣伝して、高度成長路

線を誇らしげにつつまっている文明圏に、汚らわしく、質素なヒッピーが現れたとき、在来の文化はいささかの震撼の情を交えて、彼らを蔑視したが、石油危機以後の先進国の「消費者」たちは、今後の生き方の先駆者として、彼らを再評価し始めなければならないのではないかと、ヒッピーたちやイッピーたちは、現代の物質万能主義に「ノー」を唱え、粗末な衣服をまとい、手作りのアクセサリーで身を飾り、残り物をあさり、禅に学び、ヨガの教えに従って自らの魂を救おうと願ったのだ。

若者たちは、自ら意識していなくても時代を敏感に察知して先取りするものだ。大人たちが「消費優先型」経済から、今後は「節約型」経済に移行するといはるか以前に、若者たちはアメリカ農民の労働者であるGパンを愛用しはじめた。画的なネクターとストーンスタイル「ノー」を唱え、年中一着で過ごせ、しかも洗えば洗うほど洗いらしのよさがでる

Gパンを愛好しはじめた。Gパンこそ似たりよったりで、画一的ではないかというひとがいるかも知れぬが、折目の立つたズボンでは、だれもかれも没個性的に見える。それに比べて身体にフィットしたGパンは、各人の体型をあらわに見せて、実にユニークだ。平たい尻の子とびだした尻の子、まん丸い尻の子——どれも個性がよくでていて、ひとりひとりの個性を大切にすること——それが彼らのエトスである。

世界のだれが髪を長く伸ばしはじめたのか、はくは知らないが、マッシュルーム型の長髪を流行させたのは、明らかにビートルズである。彼らは既成の風俗にも「ノー」を行使する。風俗の根底にある既成の価値感に、拒否権を行使するのだ。だいたい人類は一〇億年前に地球上に両足で立って以来、ずっと長髪であった。髪を短く刈りはじめたのは、たかだか二百年前後、日本という明治以降である。だが、わずか一〇億分の百年の生

活に慣れ親しんだ「閉ざされた心」の持主には、若者たちの長髪が異様に、そして不気味に映った。異形の者ともいうように——。だがいまやアメリカ映画に登場する大人たち、学者も歴史も刑事も合をたく、髪ともみあげを長く伸ばし、ひげをたくわえている。日本でも前総理が、大臣の椅子を降りたとたん長髪にして、失笑を買っている仕末である。同じやるなら、総理任中にやればいいものを——。

現代の体制を支えるテクノクラシーが内包する科学技術信仰にも「ノー」が投げつけられた。科学がもつ没価値性、それに付随する無機的な専門用語が、どれほど人間の良心を麻痺させてきたと。カシオドア・ローザックは、怒りをこめて指摘する。「わずか一年間で、第二次大戦の全期間を通じて、ヨーロッパに浴びせた以上の猛爆をアジアの小園に浴びせることが、エスカレーション」として通用することになる。……都市を放射能に汚染された瓦礫の山と化すとが、都市

の、ディク・アウト」と呼ばれる。強制収容所が、戦略村」となる。戦争当事国双方の殺戮ぶりの比較が、キル・レイン・と呼ばれる。死体の集計が、ボディ・カウント」と呼ばれる……と。

戦争に対する人間の良心の問題を考えると、はくはジョーン・バエスのことを思い出さす。徴兵制度と闘うために、女性はないをすべきかと問われたとき、彼女はこう答えている。「女性はノーという男性に対して、イエスというようにすべきです」。そして結局彼女は、徴兵カードを焼きすてて監獄入りした青年と結婚したのである。既成の文化、在来の価値感に「ノー」を投げかけることによって生れた文化が「対抗文化」(カウンター・カルチャー)である。対抗文化のエトスは、それを主張するグループごとに千差万別で、それがいろいろにはむつかしいが、アレクサンダー・クラインがわりやうまく要約しているので、それを用いる。「ぼくらはあなたが大それ

たところはない。まったくちがった存在であり、新しい種類の人間、ことなつた人種であり、より深い洞察力、より真実な愛情、より充実したよろこび、より繊細な良心、ゆらぐことのない平和愛好心などをもっているのだ。はくらくこそ(この世界を)救済することができる」

### (Ⅲ) 必要なのは愛だけ

ビートルズは「トゥキヤザー」ということが好きだ。対抗文化の中心概念はひとりひとりの個性を尊重するのと同時に「トゥキヤザー(いっしょ)」にすることを希望する。といつても井戸端会議のおかみさん連中や、団地族の集団性とは異なる。トゥキヤザーの意識は、簡単にいえば同族意識である。旅にでた若者が犬のように鋭い嗅覚で相手を嗅きわけて、すぐ仲間になるあの意識である。人間どうしと自然に対して、魂の深奥から優しい気持を抱きうる感覚だ。ひとひとが同

じ感覚で、同じことがらを経験するとき「トゥギャザー」の状態になる。だから大きな群衆が平和行進やロック・フェスティバルで「トゥギャザー」になれるし、小さなグループがレコードを聞いた時、ともに旅をしながら「トゥギャザー」になりうる。なかでももっとも強力なメディアは音楽であり、なかでもビートルズが世界中の若者結び合わせるのに、大きく貢献したと思う。

ただし、いっしょになるといっても、トゥギャザーは他人志向的に、自分の個性を喪失することを意味しない。それどころか、個人が自己を回復しようとするときには、自分のヘッド（頭という意味よりも、人間という語感のほうが強い）をトゥギャザーにしようとする。ビートルズのこと、トゥギャザーは、同族（対抗文化）との連帯とともに、自己のアイデンティティを回復する手段である。

くどいほどのリフレインで、ビートルズは「オール・トゥギャザー・ナウ」から生れたように思う。

れてきた。若しみとはわれわれがいつもおかれている状態だ。そして痛みがひどければひどいほど、神が必要になる。神は痛みの度合を計るコンセプトだ、という意味のことを、ジョン・レノンが語っているが、この曲はそういったコンセプトから生れたように思う。

珍らしくビートルズはフル編成のオーケストラをバックに歌う。「……けれどまた、彼らはわたしを長い曲りくねった道に引き戻す、むかしむかし、あなたはここにわたしを置いてけぼりにした、ここでわたしに待ちぼうけをくわせないでほしい、わたしをあなたの扉へ連れて行って下さい！」

おそらくこの曲を聞いた後、胸がじんとする。そして、リパールの非行少年時代の魂にさえ宿っている神のコンセプトに、ねたますら覚える。

いうまでもなくパッチは、神の恩寵のなかに降臨と生きた。それから約二〇〇年後、神は痛みをはかる尺度として実感されるようになり、ビートルズは「必要なのは愛だけ」と絶叫した。

もしかして、パッチを神と宇宙に関する純文学だとすれば、ビートルズは愛を主題にしたヌーボ・ロマンである。ビートルズ・フクロワーム！

（著者は関大・社会学部教授）  
なかのしよぞのぞ

ム・トゥギャザー」と叫ぶ。それは閉ざされた心の相手に向って発する「ぼくはあなたを自覚めさせたい」という叫びに聞える。ぼくは、アメリカの一女子学生が「アイルランドはわたしたちに社会的意識を与えてくれた。ビートルズはわたしたちにあわせになる方法を教えてくれた」と語った意味が、よく理解できる。

ビートルズは、暴力について否定的であるようにぼくは思う。それもぼくの氣質に合っている。あの驚愕的なロック「レボリューション（革命）のなかに、「けれどもきみが破壊について語るとき、きみはぼくを仲間の一とりにかぞえないでおくこともできるんだってことはわかってるネ」という一節がある。ビートルズのこのいい方は、いささか歯切れが悪いが（曲のリズムもそうだが）、ともかく「カウント・ミー・アウト」と歌われている。

対抗文化の担い手であるグループの幅は、きわめて広い。「風がどちから吹

いているのかしるためだ。だったら、象気台職員なんかにならなくなったっていい」というアイルランドの歌から、その名をとったウエザーメンも、その一員にかぞえられた警官隊に歯向ってゆく。しかし、アメリカの一女子学生が語った「しあわせになる方法」として、ビートルズは「必要なのは愛だけ」と考えていたようにぼくは思う。「オール・ユー・ニード・イズ・ラブ」である。

ビートルズを乗りこえて、ウエザーメンのような、過激派集団が、歴史の舞台につきつきと踊りたことは、よくご承知のことだろう。だがぼくは、うますたゆまず愛を歌ってきたビートルズに、トゥギャザーする。

ひとつここで、ぼくの好みを語らせてほしい。ぼくはビートルズの「ザ・ロング・アンド・ウィンディング・ロード」が好きだ。この曲を聞くとたいへん靈魂の高揚を覚える。人間は苦痛とともに生

最も使い易くて・高水準の・新型・独和辞典の誕生！！

同 学 社 版 矢儀・西田・土屋・根本・有村・恒吉 共編  
**新修ドイツ語辞典**

新書判 1,320頁・箱入・定価1,600円

初めてドイツ語を学ぶ者に最適な辞典ノ

- ①生きた現代ドイツ語を中心に5万余語を収載
- ②発音はカナ表記と音標記号を併用親しみ易い
- ③訳語毎に旬例・文例極めて豊富、訳は現代語
- ④和独の部・日常会話・文法篇も付き便利重宝
- ⑤英語からドイツ語に入る諸君に絶対学習辞典

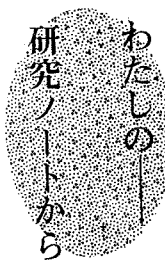


内容見本  
送 呈

ドイツ語書 株式会社 同 学 社 113 東京都文京区本駒込1-11-19  
専門出版社 TEL 944-0361 振替東京166920

# 日中文化関係史の一面

(XVI) 増田 渉



## 『雲南新話』

先に、アヘン戦争をわが国で読物小説にした幕末の刊本数種をあげて、簡単な説明を加えたが、そのとき省略した一種を、やはりアヘン戦争にも関係するものであるし、いま補足しておきたい。これはアヘン戦争を、直接の中心テーマにしたのではなく、その後日譚的なものとして、「太平天国」の反清革命の起

りを書いているものだ。太平軍の勢いの烈しさは到底、清軍だけの手には負えないのを見て、アヘン戦争後、清国と交易していたイギリスが、「その心の奥は知らねども」清国への援兵として大軍を派遣するけれど、清・英連合軍は散々に打ち負かされた、というフィクションになっている。

『雲南新話』と題する美濃版半紙の一冊本で、巻首に色刷りの清国地図があり、本文中にも所々に薄色刷りの挿絵が入っている。表紙題簽の『雲南新話』の脇に「一名はいやはなし」と小さく入れ、また表紙裏にも「一名唐土はいやはなし」と副題されていて、嘉永七年（一八五四）の新編である。

「はいやはなし」というのは、当時の風説書に、「太平天国」の主導者を石灰商人（朱筆、字は元暉、号は天徳）であったと伝えられたからであろう。この石灰商人は明朝の後裔で、明朝回復のため農民軍を率いて清軍と交戦したことが著す所の『雲南新話』は明帝の後胤一挙して清朝を討つ、英夷大軍を率て清軍を助け、清・英の両勢ともに南京府に於て、敗走に及ぶまでを初編一冊に著して上梓す。なお萬歳の勝利、清・明何れが功を全せんや、それは近刻後編に委し著して一覽に備ふ。文好堂主人誌」とある。文好堂主人という仮名の著作であるわけだが、聞いたことがない。太平軍が南京に入城したのは嘉永六年の三月（旧暦二月）であり、この書の刊行は嘉永七年だから、太平軍が南京を陥れたあたりまでしか、当時まだわが国に情報（それも不確かな）は伝えられていなかったのだろう。それでこらで筆をとめた後編を書くつもりであったかと思われる。なお、この小説ではイギリスが清軍を助けて太平軍と戦ったと書いているが、このような風説もあったのだろうが、これと全く反対の風説もあったと伝えられている。嘉永六年、ペリーが来航した当

風説としてわが国に流れていた。『雲南新話』の本文中にはこの「はいや」というのは出てこないが、しかこのような風説にもとづくものであることが知られる。

この書のはじめの部分に、アヘン戦争で清国が敗れ、國勢は衰え、奸臣酷吏がはびこり、我欲に走って農民を虐げたとを記し、そして発奮、この字にきんとルビをふっているという明朝の末裔で、代々村人から尊敬されていた者を主謀に、農民群衆が官に反抗したことが発端で、やがて朱愆は推されて雲南王になったとしている。それに二編の強盜集團も加担して益々その勢力は強大になる。清朝は大軍を発してこれを攻撃したが敗走する。雲南王の軍は勝ちに乘じて、広西、貴州の二省も陥れ、さらに四川に入り、江西に入り、向うところ敵なく、数年ならずして雲南、貴州、広西、四川、湖広、江西の六省、数千里の地ごとごとく雲南王に属し、そして「いでや南京

府を攻落さんと誓々として進みけり」。そのとき「英吉利國は去る道光二年、清国と戦い、思ふ程に打勝ち、終に福建、寧波、浙江、広東を始め要港をし（上）め、數州の地を略し、交易を肆にせしが、今度後明の軍しはしは勝て、清国究迫に及べるを見て、其心の奥は知れ共、清國の援兵と号し軍艦七〇余艘、戦卒八万余騎にて到着し、清軍を援けた。だが雲南王の軍は南京を陥れ、「狼狽する英吉利勢をこに突伏せ、かしこに切符（て）、息をも絶がせず迎立ければ……數千門の大砲を打并（て）、たゞ足もなぐ伏まぐられ、福建府にもたまり得ず、一先本國へ引取（ら）んと港口へと赴きしが、いつの間にかは到りけん、後明の猛将數千の戦艦を港口に排列し、火船を以て英吉利の軍艦を焼討せしかば、海賊と聞へし英吉利の軍艦も残り少く焼立られ、本國さして敗走せり」。

というところでこの小説は終わっている。最後に作者の附記があつて、「右に

時の風聞や応対の様相を記録した写本数種を私は所蔵するが、そのうちの三種まで。

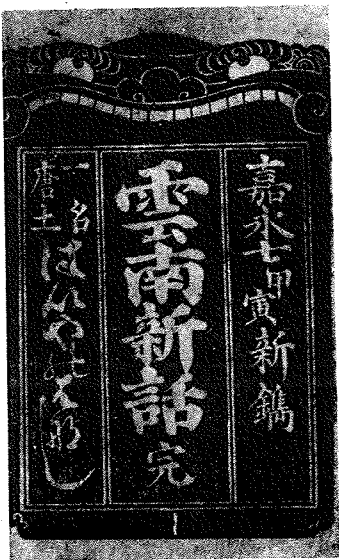
「風説に此節唐土にて、明末(裔)の兵起り、清と取合最中の由、インキレス

(は)明を救(う)て大に戦(う)る由、アメリカ其陸に日本を手に入れんとする由なり」

という記載がある。これは蒲賀の米使 応接方与力、樋口多太郎なるものから伝

えられたとあるが、当時の我が国には、とくに米艦の来航に刺戟されて、いろいろな風説、臆説が乱れとんでいたことが知られる。

### 『太平天国』読物小説の仮構



『雲南新話』より

「太平天国」革命を取扱った幕末の読物小説には、前記『雲南新話』のほかに、数種が出版されている。ただしこれらのものには、みな「太平天国」という固号も、その主導者の洪秀全(あるいは洪秀良)という名前も見あたらず、すべて朱氏という明朝の帝王の姓になっている。従ってそれがキリスト教主義を少くとも建て前とした蜂起集団であったことには言及されていない。どの読物も明の末裔の朱氏が起って、清朝に反旗をひるがえし、明朝回復を謀った反乱軍の蜂起としており、そして各地で清軍と攻防、合戦をすることを主としたものだ。まず軍記というか、軍談というか、そのよう

な戦闘合戦を中心とする読物である。

これらの読物小説は、大いた当世(嘉永年間)福建その他の唐船や、また朝鮮から、長崎に伝えられた風説に拠ったものようだ。この種の風説は、私の収蔵する『清朝擾乱風説書』と題する写本のなかにも、嘉永六年二月のものが二種、同四月のものが二種、同六月のものが一種ある。この六月のものは対馬の宗氏の家来が、朝鮮の訳官から聞いたとして幕府に報告したもので、やや真に近い、しかし簡単な情報であり、各種の写本に転録されているものだが、他はほとんど、奇妙な尾ヒレをつけた噂話を伝えたものにものだが、主導者は明の後裔、朱氏で、明朝の回復を企図する蜂起集団としていたとだ。これらのうち、右の六月のものだけが、主謀者は「洪姓」としているが、これも明朝の回復のためとしていることと同じである。

太平軍が南京に入城したのは、先にも

ふれたが、嘉永六年の三月(旧暦二月)であるが、私の収蔵するこれらの風説書には、どれもまだ南京建都にはふれられていない。だからその後伝えられた風説に拠ったものと思われるが、後明の朱氏が、南京に拠ったことは、『雲南新話』もそうであるが、他の読物小説にも、そのことによれたものが出ている。

これらの読物は、後明の朱氏が蜂起して清軍と合戦する点ではどれも同じであるけれども、筋の立てかた、運び方、登場する人物などは、史実とは全く無関係にめいめい勝手な仮構である。ただその中で、洪武龍という強そうな名の、後明軍を指揮する武将が、清軍を敗ることは大ていの読物に記されている。これは、先にあげた風説書の一種に、主謀は「洪姓」としたものがあるところから、それを採り、さらに「武龍」という強そうな人物に仕立てたものにちがいない。ただしこの場合でも、すべて、明の後裔の朱氏(天徳と称す)が主であり、帝であって、

洪武龍はそれを輔佐する符軍ということになっている。もう一人、李伯玉という妖術を使う女性がいる、これも後明軍の勇将で、清軍を散々に打ち敗る。総大将の朱氏のほか、洪武龍と李伯玉は『清明軍談』『蜂起勝敗記』『外邦太平記』などにも登場するのは、同じソースに拠るものかと考えられる。

### 数種の『太平天国』読物が出る

いま私の収蔵するこれらの読物小説の刊本をあげると、『雲南新話』(嘉永七年)のほか、『清明軍談』美濃版五冊(嘉永七年序)、『蜂起勝敗記』美濃版五冊(刊行記年はないが前書の後編と見られる)、『新説明清合戦記』美濃版五冊(嘉永七年序)、『外邦太平記』美濃版五冊(嘉永七年序)、『滿清紀事』美濃版五冊(無名散人序、記年はない)、『清賊異聞』美濃版五冊(青衛山人の「附言」があるが記年はない)がある。

これらはすべて先にあげたアヘン戦争を扱った読物小説と同じパターンで、巻首に地図や登場人物の肖像絵があり、本文中にも所々に見開きの挿絵があり、平仮名まじりルビつきである。このうち『清明軍談』巻首の「例言」を見ると、次のようなことが書かれている。

「此編ハ支那人ヨリ告布スル書ニ原ゾク其文ニ朱氏、名ハ華、字ハ元暉、四川ノ石炭賈、年号ヲ天徳ト建テ、兵ヲ広東諸州ニ募リ、浙江（一）妖婦李氏兵ヲ率テ是ニ加ルトアリ。」

（略）

「宗家ノ注進状ニハ大元師朱氏自稱シテ天徳帝ト云ヒ、洪武龍が秦ハ広州郎山ニ有テ、朱氏ヲ助クト書ス。（略）」

「石炭賈ノ前回ニ乾隆・嘉慶・道光三帝ノ御代ノ治乱ヲ著スモノハ、朱氏が興ル事ノ一朝一夕ナラザル所以ヲ云（ハ）ンガ為ナリ。（略）」

右の「三帝の御代ノ治乱ヲ著スモノ」は、だが「石炭賈ノ前回ニ」書かれてい

るのではなく、第三巻にあって、道光朝に起ったアヘン戦争のことが、その発端から和議までを「清英合戦の事」と題して、全く独立した一章になっている。

『羅剎勝敗記』では、『雲南新話』と同じように、清国側はイギリスの援助を求め、沿岸の港口に駐屯するイギリス軍ばかりでなく、英本国からも援軍を送って来たが、散々に打ち敗られる、というふう

に書かれている。

なお、洪武龍、李伯玉はわが国の読物小説家が任意に思った人物であるようだが、多少の拠所と思われるのは、長崎来航の清国貿易船が伝えたという嘉永六年一月の風説書（前記拙稿の『清朝擾乱風説書』に収載）に「賊黨は朗山と申し」とか「賊首の内に婦人一人、沙門一人ありて妖術を行ひ」と見えていることだ。

### 『清明軍談』とその続編

『清明軍談』の最後は朱元暉が洪武龍

の続々編というべきものようだ。ただ青衛主人、あるいは青衛散人」とは如何なる人がを詳かにしないし、ハッキリしたことはいえないが、いま推測されることを附記しておく。

### 『清賊異聞』と「小刀会」

『清賊異聞』には、だが他の小説とは

（大元師）李伯玉（副将）等を従えて南京を改め陥し、ここを王都として天徳帝と称し、「滿清の風俗衣装を改め、大明の政に復し」たので、「中華忽ち二つに分れ、騒動大方ならず」で終わっている

そして、その後これにつづく出版広告のような文章があつて、いう

「是より羅剎も北方に蜂起し、大清の旧國滿州の都を襲ひ、寧古塔、黒龍江迄攻入て天徳帝に属し、又英吉利（は清を援けて恐布も武龍が智勇、李伯玉が妖術に歎服して後明に降り、清の当主感豊翁自ら鉄鉞を執て数度の大戦、終に利なくして北京京都の陥（る）まで面白き異聞珍説、忠臣貞婦の事情、神仏の靈驗等に至る迄、方今の中華の説を殘さず記して後編として嗣（い）で発売。」

と書かれている。南京の天徳軍に呼応して、北方の羅剎（蒙古）も蜂起して清の旧國滿州を襲ひ、英吉利も後明に降つたというのである。これも嘉永六年の長

ちがって清軍の最後の勝利、平定で終わっている。朱氏の脱った南京も、清軍のはげしい攻撃でついには落城し、「大清再び太平を奏す」とのである。

この書の最初目次があるが、その後「附言」があつて、

「後明天徳（帝）蜂起ヨリ前後五年ニシテ滅亡シテ、大清泰平ヲ唱フルニ至也

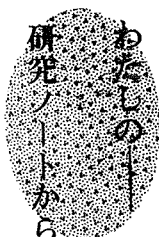
『清明軍談』巻首の「例言」の末には「青衛主人識」とし、また表紙裏には、「青衛識」とある。そしてその巻末の識語には副刻を予告し、これを承けたように『羅剎勝敗記』は書かれている。だから『勝敗記』は『軍談』の続編と見られるわけだが、ところが先にあげた『清賊異聞』にも「附言」があつて、その末尾にも「青衛散人述」とされている。とすると『清賊異聞』もまた『清明軍談』



「清明軍談 I」より

# 空間構造の差別 (Ⅶ)

三 榮 吉 末



## 「建築空間の安全とは何か」

の巨大なフロアを全焼した。もっと近いことをいえば、ついこのあいだ(今年の二月)神戸で「防災街区」として建設された「神戸デパート」が別館をのぞき一階から五階までのフロアをはほぼ全焼している。

1。先に「コンビニートによる生活環境破壊」の項でも述べたように、このような災害が発生すると、ただちにその当事者やそれに近い者の中からの災害がいかにか「特殊」なものであり「予測不可能な」事故であるかということが声高に宣伝される。さらには「私のデパート(あるいは企業)では決して起り得ません」という発言もなされる。千日デパート火災で一八八人の人が殺された直後に、ある建設業界新聞は「建物に罪はない」という大見出しをつけて「建物」ではなく「建設業界(建築家から施工業者のすべてを含めて)」を非難する記事を書いたものだ。そのような発言をする者たちの真意はほとんどすべての場合において、

0。去年(一九七三年)の一月二九日の火災は多数の買物客をまきこみ、一〇三人の人を殺し、それ以上の人々を負傷させた。大阪では一九七二年五月三日に千日デパートの火災で、一八八人も人々が殺されたばかりだし、大洋デパート火災の直前にも高機の駅前で隣店を数日後にひかえて、トッカン、工事で仕上

げを急いでいた西武デパート高規店がそ

といながら、それにつつづけて、

「サレ共、彼土ニテハ未ダ小刀会ト称スル奸賊、数國ノ間ヲ横行ナシニヨツテ、官兵屢々追捕スト雖共、不殘平タル事アタハズ、因テ四海靜謐ニ及バズト聞ク、コレ中華ノ官吏柔弱ナルニ由ル歟、且ハ彼(多)詳ナラズ。海外ノ人氣風俗ハ書籍ニ因リテ聞スルノミニテ、我モ人モ彼土ニ至ラザレバ其密ナルヲ察スル事能ハズ、只評シテ止ム而已。青衛散人述」

といっている。太平天国軍が蜂起して五年にして滅亡したというのは、いい加減なことで、実は前後一五、六年にして滅亡したといへば、この小説が書かれたと思われる嘉永末年、あるいは安政はじめころは、太平天国の南京建都の初期に当る。

だがこのなかで「小刀会」がなお数國の間を横行しているといっているのは、ほかの小説には見られないところだ。

「小刀会」は明の滅亡以来民間に潜伏した反清組織であった「天地会」(また「三合会」)の一派とされるものである。キリスト教主義を掲げるものではないが、「反清」ということは、「太平天国」に一致していた。太平軍の起った初期にはこの「天地会」系の反清組織も吸収したとされるが、太平軍が江、浙に侵入したころ、広東、福建、浙江の各地から上海に集まっていた「小刀会」党は、同地の会党と結合して、太平軍が南京に入城して間もない時、それに呼応して嘉永六年(一八五三年)八月(旧曆)ついに上海城を占領した(主導者は広東省潮州人、劉麗川)。そして南京の「太平天国」との合流援助を願ったが、密使が途中で捕まって成功せず、占領軍は孤立して、一年五カ月で壊散した。「太平天国」の反清革命との連帯的蜂起軍としてのこの「小刀会」反乱は、地域的にも近いところとだし、当時の我が國にも早く伝えられたことであろう。次にあげ

ようと思う「漢清紀事」になると、「小刀會話」と題題されているのである。なお、「小刀会」の上海城占領のことは、『同治上海県志』巻一一「歴代兵事の項にかなり詳しく記述されているが、また黄益の『吳林小史』(上海掌故叢書)一九三五年(上海通社)に所収)は目撃者として見聞を整理した記録で、かなり真相を伝えるものだといえよう。近人の執筆で私の見たものでは、徐蔚南の『上海小刀会乱事始末』(一九三七年三月)『逸経』第二期)がよくまとめられた記述だと思つう。

またこの期の「逸経」には同時に、牧師バグダ(吳瑞士)の「小刀会佔拠上海目撃記」と教師 Roberts(羅孝全)の「小刀会首領劉麗川訪問記」を、一八五三年の九月一〇日付および一〇月一日付の「ノース・チャイナ・ヘラルド」から英文文を訳載している。

著者は岡大・文学部非常勤講師  
ますだ わたる

その災害の原因を、ある末端の個人の、「ミス」として位置づけることによつて、より本質的な災害の原因や責任をばかしてしまふことになる。

例えば、ある人のたばこの不始末から火災が発生し大惨事に至つた例があるとすると、その人の刑事責任は徹底して追求される。しかし、問題をそのように個人の「ミス」の責任関係としてのみ追求して、限りの災害を防ぐことはおろか、いづらが減少させることさえも、けつして出来はしない。どれほどに注意をしていても、そのような「ミス」はすべて人間が、無数の場所、おかしうものであるからだ。明確な意志からではなく（例えば放火、全くの「ミス」によつて大惨事の直撃の原因を作り出した人といふのは、むしろただ「運が悪かった」だけだといつてもよいものであり、「その人」はまったく同じように「別の人」に代りうるのである。それは「私」であつてもよいし、「貴方」であつてもよい。

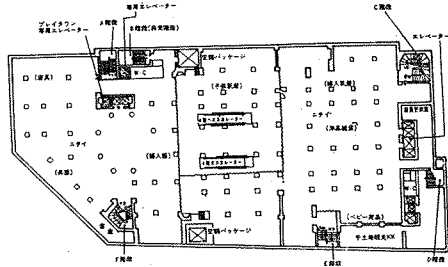
問題はまったく別の次元に移つていく。具体的な話をしよう。例えばデパートについて考えてみる。それは梅田の阪急デパートでも阪神デパートでもまったく同一とみてよい。デパートにおいて、例えばハッドVはほとんどないか、あつてもその機能は、本来ハッドVの持つ多種多様なやくわり比べてみると非常に限定されたものになっているのが普通である。すぐ気づくことが阪急デパートの何階かのフロアについて「外リントV」が「見える」とはめつたにない。ハッドVを掛けて「外気」に触れることなどまず不可能だ。ハッドVが「見え」て、「外気」に触れることが出来るとはどういうことか。ハッドVのこのあまりにも単純なひとつのやくわりは実は非常に大きな意味を含んでいる。そこからハッドVや他の場所が「見える」といふことは自分の居るハ場所Vの位置關係がわかるといふことだし、「見る」ことによつてハッドVあるいは他の場所の状況を直接的に

私たちが日々の生活を営んでいる建築空間や都市空間が現在の如く一触即発の危険でみちみちているとき、私たちはヒトツマチが、E、多くの人を殺す事になりかねないし、同様によつて不意に殺れることだつてあり得るのである。不意にも「殺人者」や「犠牲者」にさせられる機会はそのくらいにいくらでもとどろがっているのだ。

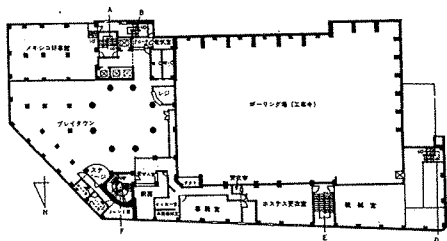
問題はそのようにある人の「ミス」に帰せられるべきものでは断じてない。本質的には、そのように「誰でもおかしえる」——したがつて無数に発生しうる——「ミス」を、人々を殺傷するような災害にまで導く基本的構造をこそ問題にするべきなのである。問題が拡散しないように建築空間に限つていへば、例えば物を売りつけて暴利をむさばることだけをその本質的目的としているがゆえに、災害の条件なきまかつく無視して所せしと、「商品」を並べ、そこにひしめきあふほどの「客」をあの手で呼び込む経営者や、それに追従し、ただ建築物が構造的

に建ちえるという条件だけで「より高くより深く」をきそうが如く建物設計していく計画者の側にこそ、より本質的な責任の追求がなされなければならぬのである。

2) 「建築空間の安全性」とか「建築防炎」といふコトバは決して目新しいものではない。ところがそのようなタイトルのついた論文や書物をいくら読んでみても、そこに述べられているのはほとんどすべての場合においてこのように建てれば、より高く、より広く、より深い建物を作つても「われません」といふ構造力学上の問題か、あるいは「このよな建物には、このような設備がいりません」といった建築の設備技術上の問題に限られているといつても過言ではない。構造技術や設備技術の「発展」は、それはそれとしてももちろん重要なことであり歓迎されるべきことには違いないが、そのような「技術の発展」をワツミにして現実には建物が作られていく段になる、



上 三階 下 七階  
千日デパート・平面図





知ることが出来るということでもある。これはごく当然なことなのであるが、災害時においては、いかに「高度」な構造技術や設備技術よりもこの基本的条件の方がけるかに重要なことである。どこかの火災事例をとってもよい。例えばばかりやすいように阪急や阪神デパートを例にとるとして、そのどこかの階が火に包まれ、あるいは煙に包まれたとすると、おそらく非常に好運にも停電にはならなかったとしても、黒煙であたりは真暗闇になるし、さらに普通の場合は、まず真っ先に煙で目とノドをやられるから、なおのと「見え」にくくなるはずである。(例えば、大洋デパート火災のとき、六階から煙に追われるようにして飛び降り、奇跡的に命を取り留めたある女店員は、煙の中を逃げまわっているとき、その階の電気は「消えていたようだ」と証言しているが、実際はそれのとき「電気はついていた」のである。そしてほとんど役に立たないほどに煙が拡がっては

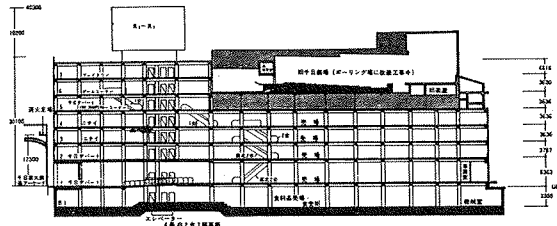
たのである。停電になればもう論外である。しかも停電になることが、実際には多いのだ。正常時においてさえ、私たちは暗闇には自由に動きまわることが出来ない。ましてや、トコロセンと物(商品)の詰まった場所で、しかも多数の人間がパニックに陥って逃げまどう状況を想定してみれば、そこから「助かる」ことは、それを文字通り「奇跡」的なことである。私たちが、日常的にある場所で動きまわることが出来るのは、その空間の中や周辺に、ある「目に見えぬ物」を基準として設定し、それと自分の位置関係を確認しながら動くからである。(この基準の設定の仕方は「目に見えない人」の場合には当然別の仕方がある)暗闇では、その行動の基準がないということだ。またハマドVを開けて外気に触れ得るといのは、ハソトVの空気を吸えるということのだが、これも火災の場合何ものにも置き換えられないほどの重要性をもっている。例えば、千日デバ

ートの火災において「焼死」者は、一人もいなかった。飛び降りや転落を除けば、すべて人が、煙に中巻死であった。大洋デパートの場合にもほぼ同様であるはずだ。火や煙の災害にまきこまれた人たちは、すべて「息を吸いたくて」走りまわるのである。「飛び降りる意識なんてなかった。ただただ、息を吸いたかった」と語る先の女店員の言葉が何より正確に、その恐怖の状況を語り尽くしている。

3) ハマドVのやくわりは前述べたことに尽きるのではもちろんない。もっとも多くの意味をもつものであるが、ここで用いたおきたかっただけ、そのようなるものも意味や機能をもつ「ハマドV」を、「人工照明があるから」とか「機械的に空調すればよい」とかの理由でハマドVをなくしていく方向に引っぱっていったのが設備技術の発展上無惑建築であったからである。現在では「無惑建築」というものも存在しており、デパート等を始め

として多くの建築物が何らかのカタチでそれに近づきつつある。「人工照明」とか「空調」設備があるからハマドVはいらないという発想は、ハマドVのもろもろの意味を「外の光を取り入れる事」と「外気を取り入れる事」に極端に限定して考え、それに対する代替物を設けたからよいとするものである。しかも人工照明や人工空間は災害時にはまったく何の役にもし立たないものなのである。このハマドVと設備技術との関係は「現代技術」のありようを正確に物語っているひとつの例である。

4) 先ほだから私は何度か建築空間、間とか都市空間というコトバを使ってきた。そしてこの八空間というコトバは建築に關係する人々の間では日常的に使用されるものである。しかし実際にこの八空間というコトバの意味を理解している者は非常に少ないのである。ほとんどの「建築家」や「計画家」はこのコトバを無意識にか、あるいはカッコヨク使って



千日デパート・断面図

いるだけでその内実など何も知っちゃいない。そのコトバの意味が解っておれば、現在建っている類の無数の建築物など出来るはずはないのだ。例えば「建築物の安全」とか「建築空間の安全」というコトバが使用される時、それはほとんどの場合、ハモノVとしての建築が倒壊しないという事に収斂されるものであって、言葉を変えれば「フレーム(構造体)の安全」のことなのだ。「この位の地震でゆすつても、われません」とか「このくらいの温度の炎にこの位の時間さらされても、こわれません」といふ類のものである。しかしハ安全Vというものは、当然のこととして、人間の安全、のことなのであって、建築物の安全、のことではない。これはまったく意味の違うことだ。建築物が「こわれせん」といふ事は「人間の安全」の為の大きな条件のひとつではあっても、それがあれば十分というものではないのである。これはすぐ解る事だ。例えば千日デパートにしても、大洋デバ

ートにしても建物は決して倒壊してはいない。しかし人間は殺されてしまった。「建築物の安全」は達成されたにもかかわらず「人間」にとってはまったく「安全」はかけ離れたものだったのである。このところは自明のように書いて実はそのではない。このことが本当に理解されているのであれば、現在のより高層建築物も地下街も、決して出来はしない。いや、何も「高層」や「地下街」をもち出すまでもなく、もっと「一般的な」「普通」の建物でも出来はしない。

5) △空間▽とは文字通り△Aキ▽△Aキ▽というところである。ところで私たちが建築の設計をする場合、普通には設計図を作成するのであるが、その図面に書き込まれた線はすべて何らかの△モノ▽が存在している部分であって、実際に人間が生活したり動きまわったりする場所——△空間▽——は、その「書き込まれた線」以外の部分なのである。例えば図面には、壁とか柱とか天井、床など

空間として機能しえるものではないばかりか、ほとんどの場合それはむしろ災害を拡大する元凶にさえなっているものなのだ。この建物の計画をした建築家は（そしてほとんどすべての建物も同様）に設計されているこのような△空間▽——△Aキ▽の意味をまったく知っていない。そのように△空間▽の意味など真剣に考えたこともない。「計画家」たちが、またした顔をして「建築空間」を論じ、建築の設計を行なっているのである。

6) パニックの状態において、人間がどのような心理状態にあり、どのような行動をとるのかは私はほとんど解からないが、少くとも非常に単純に、しかも即座に判断しえるもの以外は、そのような状況にある人間にとっては何の役にも立たないはずである。千日デパートの非常階段から脱出したクローク係とホステスのように、日常的にその空間を十分に認識していた者だけが即座の判断が出来たのである。例えば千日デパートにおいても、ペランダ、のような場所が、

がかき込まれているのであるが、人間が活動する場所をそれらの間の△Aキ▽の部分だけということである。それが△空間▽である。当然その△Aキ▽——△空間▽——には人間だけが「存在」するのではない。例えば煙も通過する。建築を計画する人たちは、実際に人間が活動する△空間▽の部分で△モノ▽の部分、図面にかき込みつづけているうちに、そのような△Aキ▽として△空間▽の意味の重要さを忘れてしまっている。例えば建築基準法などの法律では、建物の用途や階数・広さなどによって、どの位の階段が何力所必要」というようなことを規定している。それは当然「非常」の場合には、その階段を使って人々が安全な場所へ避難しえるようにという意味がこめられている。つまり「階段」というものが「安全側の空間あるいは設備」として考えられる。しかし実際の火災においては、この避難に使用すべき階段やエレベーターが、まず先に煙を運んで

せめて一メートルの奥行でもよいからまわっておればあれほどの人は死にはしなかったはずである。むづかしい「防災工学」などいりほしめない。災害の発生している場所から空間的に離れる場所があればいいのだし、そして「防災」とは実はその一言に尽きるのである。現在数えきれぬほど存在している「防災設備」などは、あくまでも、まず基本的に避難の出来る場所（空間）があつて、それを最低限補助するもの以上の意味などないのである。それが現実には計画者の無知のゆえに、「防災設備」を設置するのと、ひきかえに安全側にあつたプリミティブな空間を抹消していつているのである。もう紙数もないので詳しい話はないが、スプリンクラーや火災報知器があるから災害はなくなる（防げる）と考えのはまったくのナンセンスである。私はそれらがあつたにもかかわらず大災害になつた例をいくつでもあげてみることが出来る。防火シャッター、排煙装置すべて同様である。シューノール車だつて「救

来ているのである。例えば千日デパートにおいては（図面参照）、火災は三階で発生したのであるが——そして四階までの延焼でいくとめられた——階段やエレベーター（それに各種のダクトやそのスペース）などが急速に煙を最上階（七階）のアルサロまで運び、あつという間にその場所を修繕場にかえてしまった。このような災害時においてこそ避難設備として機能するはずであつた階段とエレベーターが、まず先に人間を殺す側に機能したのである。それらを使って逃げ出すどころではない。さらに、屋外に設けられた非常階段（この階段はほとんど無傷だつた）も、エレベーター、屋内階段のホールを通過しなければそこに到達することはできず、利用不可能であつた。その非常階段から脱出したのは、すぐそばのクローク係と、毎日その階段を利用して一人のホステスのみである。

つまり、階段やエレベーターなどは、ただ設置しただけで決して「安全側」の

出力」ははれている。それがいくらかでも有効に働かざる為には、その救出を待つ為の「二次避難」の場所があるのである。7) 災害は人間の想像力をこえて、起るから災害なのである。それは、「物を作る論理」から成立している「工学」的発想では、決して対処しえるものではない。災害の拡大は、無数の選択技をもっている。私たちは「工学」「技術」で災害を「やつつちよう」などとユメユメ思つてはならない。災害にいくらかでも対処していく為に私たちが成し得ることとは災害現象そのものに謙虚に学んでいくしかない。ひとつひとつの災害事例を具体的に研究し、そこから「災害の行動様式」のようなものを少しずつ学んでいき、人間の行動空間を、災害の行動しやすいう空間条件にもつていかなないようにしていく論理などないのである。

（著者は関大・工学部助手  
すえよし えいぞう）

## 特許戦略史概説 (Ⅲ)

堀 康 三

### 第二章 現代特許戦略上の 基本的な諸問題

第一章における史的概観は、現代の直面する基本的な諸問題の理解を容易にするための手段的な論述にすぎないものである。さらに、本論文の表題は「戦後日本企業の特許戦略史概説」であるが、筆者の意図した真のテーマは現代資本主義の当面する諸問題の究明にあり、第一章の史的概観が手段的な論述であるのみならず、特許戦略論自体、現代資本主義を説明する方法論そのものであるといえる。

何故なら、現代特許戦略上の基本的な諸問題とは正しく現代資本主義が直面する基本的な諸問題のグイウィッドな中核的な反映であるといつてよく、現代日本の資本主義は戦後日本の資本主義の発展段階上の一局面にすぎないにもかかわらず、全く新たな段階に至っており、生産諸力と生産諸関係の矛盾といった斉一論で説明し切れない、基本的な諸問題の展

開があるからである。本章では、この基本的な諸問題を三つに要約して概説したいと思う。

それらは、先ず第一に、主体的側面から見たものであり、企業の最終的な意思決定の場における管理労働者たちの科学・技術力と資本家の直観力との対決の問題がある。

次に、客体的側面からみた二つの問題がある。その一つは日本国内市場及び他の同質化した先進工業国市場共通してみられる技術開発力の事後評価から事前評価への転換の問題であり、他の一つは、現代の特許戦略上、外国市場を二分して考えられた残りの開発途上国市場の問題である。そして、現代特許戦略上の実質的な最重要目標は、実はこの最後の開発途上国市場の問題に焦点が絞られているのである。

## 戦後日本企業の

わたしの  
研究ノートから

### 第一節 企業の意思決定の場における科学・技術力と直観力の役割と限界

企業における支配権力者の指標は最終的な意思決定の場における絶対者であるかどうかによって決まる。換言すれば、最終的な意思決定の場において拒否権を行使できうるか否かが権力者の指標である。そして、結論的にいえば、変質した現代資本主義といえども、企業の最終的な意思決定の場においては資本家の所有権に基づく拒否権こそが絶対であり、経営管理する労働者たちが生産手段を占有する権利に基づいて発する拒否権などは前者の絶対的な拒否権によって軽く一蹴される不安定な理命にあるものである。

ここにいる資本家の所有権に基づく拒否権は資本家の最終的決裁の場の直観力を意味し、経営管理する労働者たちが生産手段を占有する権利に基づいて発する

拒否権は最初と最後の資本家による絶対的な拒否権を除く、中間の経営管理上の客観的な科学・技術性が要求される相対的な意思決定の場におけるそれにすぎないものである。したがって、現代資本主義の変革を論究する場合、資本家の所有権に基づく拒否権の絶対性を先ず、おさえておくということが、同時に、次の二つの視座が必要である。

その一つは一九三〇年代に起った先進工業国、アメリカでのテクノクラシーに関する諸問題を現代風にアレンジし直して展開しているガルブレイスに代表されるテクノ・ストラクチャ論等及びヨーロッパのマレ、ゴルトツ、トウレリス、マルチネ等のニュー・レフトが論ずる技術知識人を中核とする下からの労働者自主管理による先進国革命論の持つ本質的なブルジョア革命性をあはくことである。他の一つは外国市場論における開発途上国の問題である。

本節では、前者のテクノクライトたち

による先進国革命論の持つ本質的なブルジョア性を中心に、主体的な側面からアプローチしたい。

さて、わが国では企業者は戦前の財閥から戦後の財閥解体を通じて技術革新の新しい段階に至るまで、ずっと資本家自身であり、最初もしくは最終的な意思決定のみならず、中間の科学・技術のプロセスさえも資本家たる企業者が何らかの形で直接的に支配管理していたものである。ところが、技術革新の新段階に入るや、すなわち、重化学工業化が成熟し、生産過程が高度に迂回化され、もはや資本家個人のみでは科学・技術のプロセスを容易には掌握できなくなると、資本家は所有権のみを確保しておいて、企業の第一線としての企業者の地位を退き、それを技術知識人を中心とする集団的な管理労働者たちに譲り、彼等に経営参加の道を開いてやることになる。

この主体の転換は資本家の側の生産効率第一主義からくる労働生産性向上策の

一環から歴史的に必然性をもって行われてきたものであって、決して、ニュー・レフトたちが主張するような下からの労働者の自主管理要求闘争が勝利した結果、資本家に強制して成ったものではない。

むしろ、現時点でいえることは下からの労働者たちの自主管理要求は、革新的意図に反して、資本家のイニシアティブで、生産力と生産諸関係の矛盾の激化をカバーするために利用されている。

しかも、ニュー・レフトたちの主張に一步ゆずって、労働者が経営参加の過程で、自らの労働における疎外の深化を自覚した上で、弁証法的に、下からの自主管理をすすめるとしても、それは總体的な世界市場の視野からみれば、先進工業国における権力争いであり、剰余価値の配分争いにすぎない。

又、それは開発途上国からみれば、旧来の資本家に代って、新しい企業者という名の旧来の資本家とは比べようもないスケールの大きな科学的な情報資料をつ

## 第二節 技術開発力の事前評価の問題

技術革新の新段階に至るつい最近まで、技術開発力の事前評価といっても、特許実用新案の内外国の先願関係調査とか同業有力他社の研究開発動向をさぐる調査といった技術情報と一部の市場情報に限られており、しかも、それらは極めて客観性を欠く不確実性の強い情報であり、企業の予想収益率を大きく狂かし、恐慌を含む景気循環をもたらす真の原因となっていた。

すなわち、特許戦略上は単一発明とか発見を技術開発する場合、先願調査するわけだが、先願調査といっても出願公告され、公開情報となったもののみが調査対象とならなすぎず、特許庁側の審査段階で四〜五年間も出願の段階で滞り、眠っている発明・発見については調査不能であり、情報化されず、みすこされて、いきなり、製品化・企業化の危険を

おかして行われる。したがって、技術開発力の事前評価といっても、それらはすべて、有効需要が主観的な予測で計られており、実質的には偶然性の事後評価が常態であったといえる。

しかるに、日本を含む先進工業国間では、国内的にも、国際的にも、革新技術が①大型化の高度化②システム化するにつれて、ひとたび、一つのプロジェクトに関する技術開発が意思決定せられ、莫大な研究開発投資が投入され、しかも高度化・高度化・システム化しているが故に途中で、簡単に中止しえず、一度、決定されると、そのプロジェクト自身の運動法則にのっとり、途中で失敗と判明しても、最後まで貫かれる。

このように、企業的意思決定の時点で、企業の盛衰を決するものとして、技術開発力を事前評価する必要性が生じたのは、革新技術が大型化し、高度化し、システム化したという技術そのものの要因以外に技術外的な脱工業化社会的

め込み、一寸のスキもなくした労働者エグゼクティブとなって、旧来とは比較にならない程の事務的な強烈さで新たに搾取する主体転換の形成過程にすぎないのである。

ここで、豊かな先進工業国における富める者の説く先進国革命論の偽善性と欺瞞性があるといえよう。

しかし、筆者といえども日本をはじめ、先進工業諸国においても、労働者である企業者、又はそれに準ずる特許管理者の直観力はさてはいても、資本家の直観力による拒否権にあえば簡単に一蹴されてしまうという。又、それ故に、資本家の手のとどかない中間の科学・技術過程の支配占有権の獲得という労働者側の積極的な闘いの意義を認め、世界市場の規模で、今後、一層のダイナミックな再構成の余地を認めるということに対してはもちろん、やぶさかではない。

諸要因と関連しており、又、民間企業外の公的大研究機関、大学レベルにおけるビッグ・テクノロジー・アクセスメントに関連している。

そして、技術開発力の事前評価という意味は今日の特に生産過程が高度に迂回化した装置産業の企業では従来のような先願特許調査情報といった技術的情報や局所的な市場情報に限られない。例えは表一にみる通り、現在より一〇年〜一五年前のアメリカ産業においては、研究開発支出からの平均期待回収期間は石油・石炭製品を除くと殆んど五年未満であり、当時の革新技術は現在のそれと比べてみれば単発で、中小型であったということがいえる。(表一参照)

何故なら現在のアメリカ産業のその統計表はないけれども、日本のN食品工業の昭和四十六年度、新発売になる新製品の研究開発支出からの期待回収期間は七年であり、これを一九六一年(昭和三十六年)当時のアメリカの食料品・飲料・産業の

表1 アメリカ産業における研究開発支出からの平均期待回収期間

産業分類	回答した会社の中での割合(%)						
	1958			1961			
	3年末	3年～5年	6年以上	3年末	4年～5年	6年以上	
鉄鋼	50	50	0	38	50	12	
非鉄金属	42	42	16	64	18	18	
機械	49	45	6	51	39	10	
電気機械	23	69	8	61	32	7	
金属製品・精密機器	24	71	5	77	14	9	
化学製品	15	56	29	33	41	26	
石油・石炭製品	12	63	25	17	33	50	
食品・飲料	37	54	9	54	43	3	
繊維	65	29	6	76	24	0	
全製造業	39	52	9	55	34	11	

(出典) Mc Graw - Hill, Business Plans for Expenditures on Plant and Equipment (年報)

のタイム・テーブルを準備・計画原案をねり上げることが可能となり、それによって技術開発力の事前評価を精密化させ、企業の予想収益を大きく誤らせることはなくなり、恐慌に至らしむる景気循環を避けることになる。

しかし、このような技術開発力の事前評価方法のルートの日本をはじめとする先進国における確立は必ずしも利潤率の拡大には帰結せずして、技術革新の進展に比例して、先進国間では利潤の共食いが行われ、利潤率は減少する。したがって、必然的に日本をはじめとする先進国企業は、工業的には未だに未開発の開発途上国市場に特許戦略・企業戦略の重心を移すわけである。

### 第三節 開発途上国市場の問題

「発展途上国」という呼称に象徴されるように、先進工業国と開発途上国の差は異なるタイム・ラグであり、程度の

問題であるといった日本をはじめとする先進国側の差別的な諸見解は単に誤っているばかりではなく、イデオロギー支配的であり、戦略的でさえある。何故なら開発途上国からみれば発展段階の差は先進国による経済的搾取、政治的従属から自由の問題、資源加工上の外資と民族資本との主体性闘争の問題に還元される質的なものであるからである。

そもそも、先進国側の社会発展に関する価値観は生産に分配に先行するものであるという生産力優位論に立脚し、全体としての経済成長こそが結果として、自動的に、貧しい一般の人々の生活水準をあげようとするものである。ある程度の高度に貢献できるとするものである。

しかし、この価値観の裏面には平等化、換言すれば十分な再配分は経済成長、ひいては社会発展を遅延させるものであり、全体としての成長発展のためには個々の配分問題は未だに付すべからず、少くとも棚上げにすべからずといった全体主義的、

の研究開発支出からの平均期待回収期間が六年以上のもの三割と比べると現代のアメリカ産業の期待回収期間は大中に長期化していることが推察できるからである。したがって、技術開発力の事前評価のためにとらねらるあらゆる試みが、現代の革新企業に要請せられ、特許戦略、ひいては企業戦略の中心的部分をなしているわけである。

そして、この技術開発力の最も実効的な事前評価方法の一つとして、テスト・マーケティングがある。テスト・マーケティングすることにより、製品化段階までのテクノロジカル・ノウ・ハウや企業化段階までのセールス・ノウ・ハウを確立することができ、さらに、試験で実験せられ、修正せられた、ある程度保証せられた有効需要予測が定立でき、生産計画、宣伝計画、その後の営業計画における科学性をうづることができ。

さらに又、テスト・マーケティングすることにより、将来の合理化段階まで

資本主義イデオロギーが限ばいされていく。このよう先進国の価値観を開発途上国の利害を無視して、そのままの型で開発途上国に移植しようとしていることが現代の南北問題を極めて不鮮明にしていく原因である。

北側の先進国企業が南側の開発途上国に開発投資を行う場合、開発途上国民全体を相手とするわけではなく、一部の富める企業者である民族資本家とか、その他政府官僚といった特権的な支配階級に属する人々とのみ交渉し、彼等にある程度の利権・巧職をも含めて——を分配し保障してやるだけで、フォーマルに、進出でき、開発途上国の他の一般の多くは貧しい人々から搾取しうる強奪者が与えられ、公的公的諸権限がえられるものである。さらに、政府間援助に代表せられる先進国側の民間企業進出の前の先行投資は次のような高度に政治的な戦略を秘めていく。すなわち、開発途上国における社会階層的なカースト的不平等が経済的負

富の不等等の主因をなし、同時に、この経済的不平等が社会的な不平等をもたらしていることに着目し、開発途上国におけるこの社会的・経済的な不平等を増大させること、もしくは少くとも現存の不平等を保守し、自由放任することを主張とされている。

そうすることによって、生産効率を第一、平等化・再配分を第二とする先進国側の価値観をそのまま開発途上国へ移植するパイプはつまることなく流通し、工業化による近代化の理想型でもって、開発途上国を汚染するであろう。先進国企業進出のための基礎需要を創造することができるとは、現代の開発途上国の多くは、これら、先進国の価値観とは全く逆の、独自の価値観を対抗せしめ、先進国の戦略に大きく挑戦し始めている。

- ① 配分の均等化を促進すること
- ② 国家計画の作成・実施は国民福祉の

料輸出に特化させられ気候による自然の変化から、先進国側の原料節約のためのインフレーションによる需要減とか、一般消費者層の嗜好変化とかいった外的悪条件によって、需要は極めて不安定であった。交易条件は一方的に悪化の傾向にあった。

又、開発途上国は従来、先進国から工業化促進という売込みで、自国内の有効需要の見通しをまたいままに、多額の設備投資で余剰な機械化を強制させられており、機械稼働の段階で、はじめて国内市場の赤字をカバーするたぐに、先進国市場に販路を求めざるをえなくなっている。かかるに、これら開発途上国の工業品輸入拡大の要請に対して、先進国は第一次産品の原料品輸入にかける関税は特恵的な無税ないし低率に抑え、このような工業品輸入にかける関税は極めて高率にし、禁止的なコスト負担で答えている。このような先進国のあまりにも利己的な諸措置は開発途上国における被支配階級

向上が目標であり、経済成長は単なる手段にすぎないということである。

もちろん、開発途上国のこれら新しい価値観の形成は現存の極端なカースト的不平等を解消するものではなく、この二律背反的な矛盾は短期間に解消せず、しかも、この矛盾の解決の糸口が本章、第一節にみえ、現代先進国企業における経営管理の主体性論争から、読みとることができるとである。

第一節の結論は先進国でさえも、それ以上の生産力を発展させるためには、資本家個人の力ではどうしようもなく、可能な労働者たちの占有権の上限内ではあっても、権力への参加が必要であるということであった。しかも、先進国における権力の平等化の試みにはある程度の配分費の平等化への資本家側の進歩が必須条件として付加されたとはいえず、むしろ普遍的な傾向がみられた。その再配分

の意識をめざめさせざるをえない。そして、このめざめた開発途上国の被支配階級の人々の意識が開発途上国の権力階級をして、世界的な公理として保障された新しい価値観の政策上への応用を、現在たとえ名目的であっても、余儀なくさせヒモツキの援助よりも主体的な貿易を通じて、自立を達成しようとしめるに至っているものである。

しかし、この開発途上国の自立を妨げる最大の壁は日本をはじめとする先進国企業による先行的な特許戦略である。技術革新の成熟した現代世界に作りだす今日の開発途上国は自分が新たに作りだす代わりに、先進国がすでに開発した技術的成果を導入しさえすればよいという利点がある一方、その利点のために、現実のみならず、経済的・政治的従属から自由でありえないでいる。表一、表三を比較してみれば、日本をはじめとする先進国企業による先行的な特許戦略がいかに

の譲歩が世界的なインフレーション政策により、一時的に帳消しにされようともこの普遍的な傾向を抑えたい。

すなわち、現代の先進国においては、その開発途上国向けの従来の生産性優位の価値観にもかかわらず、必ずしも経済成長と平等化は対立する二律背反のものではなく、逆に、むしろ平等化こそが、経済成長の促進要因であるということが、実験的に証明しつつあるのである。

先進国自身は開発途上国が現在、形成しつつある新しい価値観の正当性を身をもって体験しつつあるものの、自らの利益を確保する意味合いから、開発途上国に対しては従来の誤った価値観に基づく開発方式を強制するわけである。ところが現在、人類が学びえた世界的な公理は権力的にも、分配的にも、平等化こそが経済成長をもたらす、社会発展を結果するというところである。

ところで、従来、開発途上国は先進国のイデオロギーによって第一次産品の原

表2 開発途上国(アジア、アフリカ)における外国人の特許状況

	昭和44年度				昭和45年度			
	出願件数	特許及び登録件数	特許及び登録率(%)	特許・者め国別登録占外人の割合	出願件数	特許及び登録件数	特許及び登録率(%)	特許・者め国別登録占外人の割合
1) 2) アジア州	11815	4172	35	77	9575	6554	68	85
3) アフリカ州	9226	1616	18	94	8366	1019	12	98

(備考) 1) 2) 3) 4) とともに(表2)に同じ

表3 開発途上国（アジア・アフリカ）における内国人の特許状況

	昭和44年度				昭和45年度			
	出願 件数	特許及 び登録 件数	特許及 び登録 率(%)	特許・者 め占める 内国人の 割合(%)	出願 件数	特許及 び登録 件数	特許及 び登録 率(%)	特許・者 め占める 内国人の 割合(%)
1) アジア州	3227	1236	38	23	3182	1175	37	15
3) アフリカ州	2619	111	4	6	2545	22	0.9	2

- (備考) 1) 日本を除く  
 2) アジア州とは、イスラエル、イラク、イラン、インド、インドネシア、キプロス、シリア、アラブ、シンガポール、セイロン、大韓民国、トルコ、ネパール、パキスタン、フィリピン、ベトナム、マレーシア、ヨルダン、ラオス、レバノンを含計したものを意味する。  
 3) アフリカ州とはアラブ連合、アルジェリア、ウガンダ、ガーナ、ケニア、コートジボワール、ザンビア、ザンジバル、シェラレオネ、スーダン、タンザニア、チュニジア、トーゴ、ナイジェリア、ブルンジ、マラウィー、南アフリカ、ローデシア、モロッコ、リビアを含計したものを意味する。  
 4) 資料出所：工業所有権保護国際事務局発行ラ・プロプリテ・アンデュストリエルより集計作成したもの。

に徹底したものであるがよく示されて  
いる。

開発途上国における内国人の出願に対する特許及び登録率は外国人のそれと比べると悪いというものの、昭和四四年度アジア州に関する限り、外国人よりも内国人の方が優れている。(三八男対三五男)しかし、特許・登録者に占める内国人と外国人の割合をみれば、アジア、アフリカとも外国人の割合が圧倒的であり特に昭和四五年度の方が独占率が向上していることが注目される。

すなわち、昭和四五年度、現在、アジア、アフリカにおける日本をはじめとすを先進国企業の先行的な特許侵略は八五男・九八男方、完了しているといっているのは開発途上国における政情不安、気候上の諸問題、有効需要の過少がネックとなっているにすぎない。

政府間援助による開発途上国の大衆の基礎的消費需要の喚起が充分、見込まれ

たならば、将来、何時でも企業進出の準備体制は整っているといえよう。このことは次の各説で特許(実用新案)の外に商標、意匠状況を瞥見すればより一層、はっきりと実証されることになる。

(注釈)

- 産業構造上の第三次産業化への変革の確立と同時に、他にも第二次産業(鉱工業)内部にも新たな展開がみられる。すなわち、大蔵省「法人企業統計」によると製造業企業における資本蓄積の増大とそれに伴って生じた資本の直接的な生産面からの離脱と貨幣・金融資産の蓄積という資産構成上の新しい変化がみられる。
- ガルブレイス著、都留重人訳「新しい産業国家」河出書房新社参照 et Techno cratie dans les Days Socialistes, in : 1
- Serge Mallet, Bureaucratie et Techno cratie dans les Days Socialistes, in : 1

- homme et la societe, N° 10 Paris, 1968.  
川喜多 喬訳「社会主義国における官僚制とテクノクラシー」思想社 558号所収 岩波書店
- A・ゴルト「労働者戦略と新資本主義」小林正明・堀口牧子訳 合同出版

- A・ゴルト「困難な革命」上杉聡彦訳 合同出版  
A・ゴルト「労働と消費」(アンダーソン・ブラックバーン編)「ニューレフトの思想」佐藤昇訳 河出書房所収  
A・ゴルト「先進資本主義国における革命的戦略の重要性」(マンデル他、国際シンポジウム「七〇年代の資本主義」永井進訳 新評社版所収) 参照  
A・トウレーヌ「脱工業化の社会」寿里・西川訳 河出書房新社  
Alain Touraine, de Sociologie Industrielle, in : aspects de la sociologie Francaise, les editions, ourieuses, Paris, 1966.  
Gilles Martinet, Les cinq communistes, (Editions du Seuil, Paris, 1971) 熊田 享訳「五つの共産主義」(上下) (新書版、一九七二年)  
W・Wロストフ「経済成長の諸段階」木村健康・久保まち子・村上泰亮共訳 ダイヤモンド社 一九五九年において、①伝統的社会  
②離陸のための先行条件期 ③離陸期 ④成熟への前進期 ⑤高度大衆消費時代の五つの経済発展段階に分け、論述している例などがその典型である。他にもアダム・スミス、歴史学派、フリードリッヒ・リスト、ヒルデブランド、ピュッヒャー、新歴史学派シュモラ一等にも同様の見解がみられる。





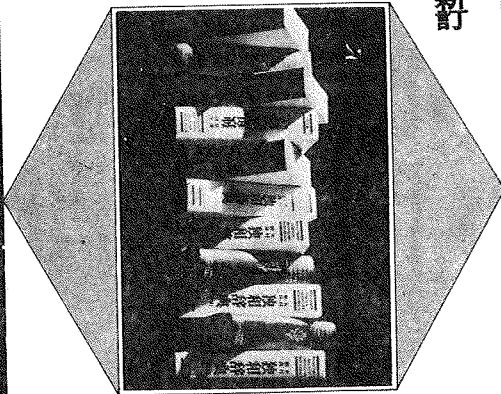
\*選ばれた独和辞典

# 木村独和辞典 新訂

相良守峯編

東京大学名誉教授

一五万語の最新で豊富な語いを  
 収め 文例 語法は適切で正確な  
 ことは ほかに類がない  
 とくに発音は アフセントと  
 長音符のほか 音標文字を添え  
 地方により発音の異なるものも  
 名詞変化によるアクセントの移動  
 にも完璧を期した  
 文法上の機能は 初心者にも理解  
 できるように留意してあり  
 語源の究明は 原意の語を示して  
 詳細に解説し 訳語の前に  
 同義語や反対語をあげて 訳語の  
 意味を確実ならしめている  
 いわゆる双解辞典の方法である  
 また 外来語には その語の  
 系統を明示してある  
 ▼とくに本辞典は毎年増刷のため  
 ことに 新資料を利用して より  
 適切な訳語 文例 新語を増補訂  
 正して内容の充実につとめている  
 本編2上巻×本編2下巻×千二百



使う身になった辞典!

博友社 162 東京都新宿区塩場町9

## 読者の声

### 「書評」の感觸

世の中は刺激というものが無くなって来た。と言うよりも刺激が習慣化されることによって刺激に反応しなくなったと言った方が正解かも知れない。皮膚に同じ刺激を与え続けるとその刺激を感じなくなってしまうのと同様である。この刺激の習慣化というやつは、学生運動の挫折を生み、大衆運動の沈滞を招き、さらには、大学生の無気力・無関心を生み出し、アンニュイとしてこの世に根をおろしたのだ。

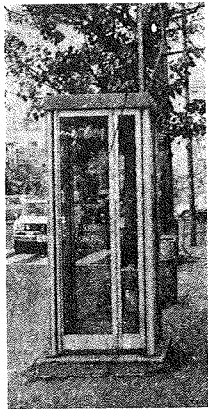
そんな中で刺激を求めつゝ「書評」を読むのであるが、まずもって感ずることは、前号の「読者の声」にも書いてあったようにむずかしいということである。と言っても全てがむずかしいのではなく、部分的にむずかしいものが入っているために、全体的イメージとしてバラバラとめくれた時にむずかしい感じがさせるのである。私はこれではいけないと思う。そしてこの逆になることを望みたい。つまり、全体的イメージとしてはイージーで中に入っていくやすく、手に取ってみて読んでみたくなるようなもの、さらに、その内容は深くそして鋭いピンと張ったものである。これは、書評のみならず全ての雑誌・文献の理想かも知れないが、安部公房のよらなタッチ、アリス・クーパーのロックが与えてくれる音楽性に見られるようなものが我々をアンニュイの中から救い出してくれ

る一刺激となり得るものだと思うしそれを「書評」にも希望したいのである。実際だれも読まなければ仕方ないことだし、同じ人間ばかり読んでいたのでは閉鎖的・非発展的なものになってしまう。

「書評」についてもう一点感ずることは、内容と我々読者との関係である。前号においてはテレビ関係のこと、前々号においては性に關すること、いずれも我々と密接な関係のものを含んでいた。これによって「書評」が我々に合った、また現在にあったものとして感じられ、その新鮮さの申に社会性・大衆性・発展性を見い出すことができるのである。

最後に一つ提案したいのですが、イラストの様な感じで小さく詩など載せたらどうでしょうか。

(社芸学部二回生・木村亜紀子)



読者の声

## 書物の案内

ある学生活動家の愛と死  
青春の墓標

奥 浩平 著

一九四三年一月、東京に生まれ、都立青山高校二年の時安侯闘争に参加、一九六三年横浜市大文学部入学。七月、マルクス主義学生同盟中核派に加盟、以後マルキストとして、原潜寄港反対、日韓交渉反対その他戦闘的学生生活を続け一九六五年三月六日、二十一歳で没す。

いつの時代にも青年期は不安定で激しやす、型破りの行動に出る傾向がある、身体的、生理的変化、特に二次性徴の発達により著しい情緒性の高まりがみられるのは生物学的見地より明らかである。そして、それが豊富な感受性で事物に共感する為、また、成人ほど既成概念に浸りきっていないため、創造的・革新的行為をとり得るのである。このような状態にある一人の青年が全学連という組織の中で峻烈に生きようとした。しかし、マル学同の分裂に伴う活動家の愛の破極と直面することは彼に大きな挫折を与えたのである。ここにおいて自殺の是非を考えるのではなく組織の中で生きること、を考えねばならない。社会から逸脱して生きできない我々、社会的人間に提示された重要な問題がそこにあるのではないだろうか。

(文藝春秋刊・五〇〇円)

## 現代マルクス主義認識論

A・シュミット編  
花崎壹平・青山政雄訳

編者のアルフレート・ミュニツトは現代西ドイツを代表する哲学者であり、構造主義に対する鋭敏の論客として注目を集めている。彼の構造主義批判は、フランスにおけるそれ(サルトル、ルフェール他)が構造主義を認識論的レベルで一応は評価し、自らもその影響を受けているとは様相を異にする。シュミットにあっては構造主義とは、後期資本主義社会のイデオロギイ構造そのものにすぎず、全面的否定の対象でしかあり得ないのである。

本書は、認識論的レベルからのルイ・アルチュセール批判であり、東西の「マルクス主義者」の諸論文に加えて自らも『歴史への構造主義的攻撃』を執筆している。しかし、彼が提唱する「歴史主義」はヘーゲル歴史哲学の概念がそのまま踏襲されており、アルチュセールの科学的な認識論的操作の厳密さの前にはいささか陳腐であり、また、批判的前提となるべき構造主義理論の理解そのものも十分ではないように思われる。

(河出書房新社  
SFT 番号・一三〇〇円)

## 書物の案内

## 「書評」編集委員募集

今年度、当編集委員会では、「書評」誌の年八回の定期刊行、講演会・映画会等の設定を計画しています。しかし、編集委員不足のため思うようには活動できません。そこで、編集委員を募集します。広範でダイナミックな活動を、状況の変革と自己の変革を求め、模索している人、さまざまな問題意識を当編集委員会でお受け合い、討論してみませんか。広範でダイナミックな活動の場を創り出してみようではありませんか。

関大——生協本部三階・書評編集委員会(会舎なし)内線・七七〇〇  
絡 大工大——生協書庫部 村井 眞  
連 組織部 中村 哲司  
専務 高野 勝久

## ☆投稿募集

「書評」誌の内容を豊富にし、また討論の場とする意味において、主張や意見および研究成果の発表として読者からの

投稿を募集します。論文・エッセイ等も結構ですが、次にあづかる本は今年度の年間テーマにそった新刊書を編集委員会が選んだものです。これらの本を参考にして投稿してもらえれば幸いです。

「魂をゆさぶる教育」 西村政英著  
(風媒社・七〇〇円)  
「おまえらばか」 江尻彰良著  
(風媒社・七〇〇円)  
「母の思想」河野信子 橋本真理共著  
(太平出版・九〇〇円)  
「メディアの政治」 津村 番著  
(晶文社・一五〇〇円)  
「私生活主義批判」 田中義久著  
(筑摩書房・三三〇〇円)

◆投稿は、四〇〇字詰原稿用紙の下二段を使用しない(一行が一八字になる)で、一枚三六〇字詰にして(一〇)二枚程度。  
◆「読者の声」は三枚以内。  
◆切は、五月末迄。  
◆送り先 千五五六

吹田市千里山東三―一〇一

関西大学生協同組合

書評編集委員会

◆直接の方、何か質問のある方は、関大生協本部三階「書評」編集委員会まで。  
◆原稿の返却には応じかねます。  
◆住所・氏名・職業(学部・学籍番号)電話があれば電話番号をご明記下さい。

尚、ペンネームご希望の方は、その旨をご記入下さい。  
◆掲載された方には編集委員会で連絡します。また、参考資料代(三〇〇〇円以内でレシートと引換)を、こちらで負担します。

本号で書評された書物や参考本に使われている書物、投稿の参考本は、生協書庫部に置いてあります。本号以後も「書評」で紹介した本は、書庫部へ置いていくつもりです。